白鯨(はくげい)との闘い

1.16(土) 2D/3D 同時公開

【プロダクション・ノート】

我々は、さらに南を目指した
1か月かけて
ホーン岬を回り――
太平洋に入った
鯨が見つかる
かすかな希望を胸に

史上まれにみる航海譚だ。米ナンタケット島を出港した捕鯨船エセックス号が、異常な巨体と敵意をもつ海獣＝白鯨に襲われた。数人の船員だけが生き残り、絶望的な状況を乗り越え、その体験を後世に伝えるべく生還を果たした。ところが壮絶な航海から200年近くが過ぎても真実は日の目を見ることがなく、その真実に着想を得た傑作小説――ハーマン・メルヴィル著「白鯨」ばかりにスポットが当たった。そして今、名匠ロン・ハワード監督のもと、エセックス号の伝説と乗組員たちの勇姿とミステリアスな白鯨はアドベンチャー大作『白鯨との闘い』となって、スクリーンに再現される。

小説の「白鯨」はフィクションだが、本作が描くのは驚異の実話であり、メルヴィルの代表作にして不朽の名作の原点だ。監督のロン・ハワードが説明する。「エセックス号にまつわる実話は圧巻だね。五感に響くよ。その中心には重厚にして映画のようなドラマがあり、展開は二転三転する。話の舞台は過去だけれど、人間模様、サバイバル、人道、大自然といったテーマにも触れているんだ。そのどれもが時代を超えて示唆に富み、人間のありようを問いかけている」

ハワードに本作の脚本を初めて手渡したのは主演のクリス・ヘムズワースだ。２人は当時『ラッシュ／プライドと友情』の撮影に臨んでいた。「この脚本には1ページ目から惚れ込んでしまった」とエセックス号の一等航海士オーウェン・チェイスを演じるヘムズワースは言う。「ここに描かれているのは人間の勇姿、そして、あらゆる意味で限界を超えた試練に立ち向かう男たちなんだ。それに、鯨が反撃に転じるというスリラーの要素にも心惹かれたよ。この生き物の描かれ方がじつにミステリアスなんだ。鯨が人間に襲いかかる“理由”はどこにあるのか。それはエセックス号の船員にとって初めて遭遇する災難だった。獲物を追う側が獲物から追われる側になってしまうんだ」

エセックス号のジョージ・ポラード船長に扮するベンジャミン・ウォーカーは、死闘を繰り広げるのは捕鯨船員と鯨

だけではないと指摘する。「このストーリーには3つの大きな闘いが描かれている。それは人間対人間、人間対自然、そして人間対自己の闘いなんだ。そういう試練を乗り越えて生き延びるには、どうしたらいいのか。この作品はそれを問いかけているんだ。だけど、試練のなかにも美がある。そこに人間の不屈の精神を見て取ることができるからね」

監督のハワードはヘムズワースから今回のプロジェクトについて初めて聞いたとき、何の予備知識もなかった。「エセックス号の話も知らなかったし、この脚本が史実を下敷きにしていることも分からなかった。でも、実話だと知ったときはたまげたよ。そして、すぐにイメージが浮かんだんだ……生々しく、迫力のある映像がね。これが映画になったら、ぜひ観たいと思った。そう思えるかどうかが僕の場合は（プロジェクトを引き受けるかどうかの）判断の分かれ目なんだ」

エセックス号と船員たちの凄絶な航海記はナサニエル・フィルブリックの原作「白鯨との闘い」に詳しい。作家で歴史研究家でもあるフィルブリックはナンタケット島を「故郷」と呼び、このマサチューセッツ州の小島に世界的な名声をもたらせた捕鯨産業に関心を寄せてきた。「この本は僕の好奇心から生まれたもの。ナンタケットが全米の捕鯨の中心地だった時代に興味があったんです。エセックス号の話は僕の心をとらえて放しませんでした」

キャストもスタッフもフィルブリックがつまびらかにした悲運の航海に心を動かされた。製作のポーラ・ワインスタインが証言する。「原作のとりこになりました。読み出したら、止まらなくなってしまったんです。そういう原作には脈があります。情熱をもって映画化することができますから。それに、原作のテーマも非常にタイムリーだと思いました。衣装と時代設定を変えれば、現代の話として立派に通用します。ここに描かれているのは野心と犠牲、息子と父親、妻と夫、動物と自然、生と死という永遠のテーマなんです」

ハワード監督の長年のパートナーとして知られる製作のブライアン・グレイザーは「自分たちの行いには正義と価値がある――このストーリーはそう信じる男たちの視点で語られますが、そこには道徳的な問題が見え隠れします。ですが、その上にはダイナミックなアクションとドラマが何層にも重なっています」「この実話はエセックス号の乗組員と航海にまつわる話だけではありません」と製作のウィル・ウォードは言う。「サバイバルのほかに、人間は自分と他人の命を守るためにどこまでやれるのかといったテーマも描かれています。脚本に目を通し、ストーリーの背景を研究してみて驚いたのは、主人公たちの生業でした。彼らは25～30メートルほどの帆船で漁に出ると、数年間は帰って来ない。海上で鯨を発見すれば、小さな手漕ぎボートを出して海の巨獣を追う。本当にびっくりしました」

近年になって、鯨は繊細な生き物であり、高い知能や感性を備えていることが分かってきた。本作の脚本を担当し、リック・ジャッファとアマンダ・シルバーと共に翻案にもあたったチャールズ・レビットは、主人公たちの生業を評価するには時代背景をかんがみる必要があると指摘する。「この映画は捕鯨を美化しているのではありません。むしろ、そのむごさを描いています」とレビットは明言する。「19世紀の捕鯨産業は基本的に鯨油産業でした。当時は地面に穴を掘り、原油を汲み上げる技術がまだありませんでした。鯨油が欧米諸国の灯をともしていたんです。赤ん坊を寝かしつけるベビーベッドも鯨の骨で作られていた。家具、女性のコルセット、生活用品の多くが鯨の副産物でした。それなのに捕鯨船に乗る漁師は消耗品扱いされていました。会社の収支報告書に載せる項目でしかなかったんです」

レビットが続ける。「このストーリーは“人間と自然”の対立を描いていますが本来、両者は対立するべきではない。人間も自然の一部ですからね。けれど、そういう考え方は当時の西洋社会では残念ながら主流ではありませんでした。人間こそが自然の支配者と信じられていて、自然のなかには動物全般が含まれていた。鯨も捕獲すべき資源に過ぎませんでした」

「観客のみなさんに捕鯨文化をどこまで理解してもらえるか。それは監督であるロン（・ハワード）の腕に、ほぼかかっていると思います」と製作のグレイザーは話す。「ロンは登場人物の人間性、多面性を描くことにとくに秀でていますから、エセックス号の船員たちが大海で生死の境をさまよう場面では一人ひとりのさまざまな側面が分かると思います」

製作のワインスタインは、本作の監督としてロン・ハワード以上の適任者はいないと断言する。「今までロンとコラボレーションした思い出は語りつくすことができません。彼ほど優秀な監督はいませんよ。首尾一貫していて、努力家で、チームワークを重んじ、包容力がある。プロデューサーとしては、映画作りの達人が相手なら、安心してプロ

ジェクトを託すことができます。ロンには託すことができるし、期待以上の結果を出してくれます」
　クリス・ヘムズワースをはじめとするキャストも同感だ。「僕の知るかぎり、ロンほど器の大きい人はいないし、プロ意識も半端じゃない」とチェイス役のヘムズワースは感心する。「監督としてのロンはいつも限界に挑戦するんだ。ロンの過去の作品を観れば、ひとつの枠に収まっていないのが分かる。純粋なコメディから濃密なドラマ、アクション大作まであらゆるジャンルを手がけていて、しかも作品に品や知性を感じさせるんだ。今回の撮影では全員が大変な思いをしたけど、そういう現場では互いに手を携え、支え合うことが大切。ロンはいつも高い要求を出してきたけど、挑戦と激励は役者の望むところだよ」
　ポラード船長に扮するベンジャミン・ウォーカーが言う。「ロンはその場の流れやスピードに乗ることを好むから、役者にも準備を万端にして現場に来ることを期待するんだ。僕もロンの意向を尊重して、それに応えたつもりだよ。ロンはどのシーンを撮るにも複数のカメラを回し、男たちの生死が成り行きに翻弄されることを表現しようとしていた。それは観客も実感できるんじゃないかな。この映画を観ていると、自分もその場にいるような錯覚にとらわれる。船上で起きていることをマストの陰から覗き見しているような気分になるんだ」
　その臨場感が狙いだったと監督のハワードは明かす。「僕は映画を観に行ったら、その映画の世界に引き込まれたい。この作品は観客を引き込む絶好のチャンスだと思ったよ。映像の臨場感を肌で感じてほしかったんだ。この実話をきちんと伝えるためには課題が山積みだったけれど、今の時代なら、どれもクリアできる。おかげでスリル満点の迫真の映像を、そしてこのストーリーならではの醍醐味をスクリーンに描くことができたよ」
　観客が本作の世界に首尾よくタイムスリップできるよう、スタッフはワーナー・ブラザースの英リーブスデン・スタジオに1800年代前半のナンタケットの港町を再現した。また、海上で展開する主要なシーンはカナリア諸島でも最小クラスのラ・ゴメラ島にてロケーション撮影を敢行。キャストの多くはエセックス号の実寸大のレプリカに乗り、19世紀の航海を体験した。
「これは壮大なアドベンチャーなんだ」とハワードは言う。「けれども、そこに心と魂と興味深い発想を重ねなくてはいけない。それをみごとに表現できるのは我らがキャストを措いてほかにいないだろうね」
　クリス・ヘムズワースとベンジャミン・ウォーカーのほかに、主要人物を演じるアンサンブルキャストとしてキリアン・マーフィー、ブレンダン・グリーソン、トム・ホランド、ベン・ウィショーが集まった。
「撮影はキャストにとって相当な苦行だったはず」とハワードは振り返る。「それでも全員が覚悟を決めて演じてくれたよ。ストーリーに秘められた真実と、自分たちが演じる人物に敬意を表すつもりでね」

エセックス号の真実
それは2人の男の物語
ジョージ・ポラード船長と――
オーウェン・チェイス一等航海士

<キャスト>
　1800年代初頭のナンタケット島は捕鯨産業で富を築き、その名を世界にとどろかせていた。それだけに、地元では島民の尊敬を一身に集める男たちがいた。原作者のフィルブリックが説明する。「ナンタケット島の捕鯨船員は、今で言う戦闘機のパイロット。“選ばれし者”でした。島のメインストリートを大手を振って歩く。前人未踏の水域を往く探検家として、地球最強の動物を相手にしていた。つまり、格好いい男たちですよ。でも、その反面、高慢なところもありました。陸の人間をバカにし、よその船乗りを下に見る。ナンタケットに生まれた少年は捕鯨船員になることがいちばんの夢でした」
　しかし、捕鯨社会にはれっきとした階級制度が存在した。階級を決めるのは実績よりも血筋だ。オーウェン・チェイスは腕のいい捕鯨船員で、何度となく記録的な量の鯨油を港に持ち帰った。ところが、捕鯨一族の出ではないゆえに、エセックス号の船長になり損ねてしまう。

チェイスを演じるヘムズワースが言う。「チェイスは労働者階級の出身なんだ。船長になるだけの実力も経験もあるのに、家柄には恵まれなかった。名門の出ではないから、血筋や経歴に不足があると判断されて船長への昇格を見送られてしまうんだ。しかも、一等航海士としてジョージ・ポラードの下につくように命じられる。それがチェイスの不満と怒りを焚きつけるんだよ」

「チェイスは勇敢で気高く、カリスマ性がある」と監督のハワードは評する。「だけど、欠点もあるんだ。自分の実力を誇示することに必死で、それ以外は眼中にないという感じだね。チェイス役のクリス・ヘムズワースは肝の据わった役者で、チェイスのいろいろな面を表現してくれた。クリスの演技をとおして、チェイスという男を深く知ることができるんじゃないかな」

新任船長のジョージ・ポラードに対するチェイスの反感は募る一方だ。ポラードの経験不足もチェイスのいら立ちに拍車をかける。「2人の間にはかなりのあつれきが生じるんだ」とヘムズワースは言う。「チェイスは自分のほうが船長にふさわしいことを充分に分かっている。ポラードも、たぶん内心では同感だと思うよ。その2人が同時に指示を出すと、船上は非常に危険な状態になってしまう。2人の言うことは食い違っているからね。ポラードは船長だけど、チェイスのほうが知識は豊富。船員はどちらの言うことを聞いたらいいのか戸惑うんだ」

ポラードは指揮官の座に就いたものの、葛藤に苦しむ。今の地位は実力で勝ち得たものではなく、与えられたものだからだ。「ジョージ・ポラードは自分の進路を選ぶことができなかった」とポラード役のウォーカーは言う。「ポラードは、捕鯨で成功した一族の御曹司で、幼いころから家業を継ぐことを義務づけられてきた――向き不向きは別として。ポラードは大きなプレッシャーを感じている。そのプレッシャーを理解することが彼の人となりを理解することにつながるんだ」

「ベンジャミン・ウオーカーは優秀な役者だよ」と監督のハワードは賛辞を送る。「ポラードのような複雑な人物を理解するだけの知性と洞察力がある。ポラードが血眼になっているのは権力を手にすることでも、鯨を捕ることでもない。名家の跡取りとして身内の期待に応えることなんだ」

「そのチャンスは船長就任とともに到来する」とウォーカーが言葉を添える。「ところが順風満帆と思ったのも束の間、オーウェン・チェイスが一等航海士として自分の下につくことになった。そこから先は2人の間に確執が生まれ、ポラードは自分自身を一家の後継者としてではなく、一人の男として見つめざるを得なくなるんだ。そこがポラードの興味深いところじゃないかな。自然の脅威にさらされるなかで自分を発見していくという点がね」

チェイス役のヘムズワースがうなづく。「難破前と難破後の対比はこの作品のハイライトのひとつだと思う。生還した船員たちは、あの過酷な体験をどう受け止めるのか。全員が最初と最後で大きく変わるんだ。家に帰り着いたとき、自分や世の中はどう見えるのか。捕鯨に対する考え方は？　また海に出て同じことを繰り返す気持ちになるのか、あるいは“これは間違いかもしれない、学ぶべき教訓があるんじゃないか”と自問するかもしれない」

船長と一等航海士が対立するなか、二等航海士のマシュー・ジョイは仲裁役となり、険悪なムードを収めようとする。「マシューはチェイスとポラードの間をとりなそうとする」とジョイ役のキリアン・マーフィーは話す。「この役を気に入った理由は訳ありな感じがするからなんだ。マシューがチェイスと親しいのはよく分かる。2人は13歳くらいから一緒に海に出ているからね。それに、マシューは今は立ち直ったけれど昔はアルコール依存症だったことも察しがつく。この男は演じる対象としてじつに興味深い」

マーフィーは脚本と監督にも心惹かれたという。「脚本を一読して、最近ではあまり見ることのない汗臭い冒険記だと思った。この脚本は読み出したら止まらなくなる類の脚本で、寝ても覚めても頭に残ったよ」 マーフィーが続ける。「あとはロンと組めるのも魅力だった。昔からロン・ハワード作品の大ファンなんだ。撮影現場の雰囲気は監督によって決まり、それがキャストやスタッフに伝わるというのが僕の持論なんだけど、ロン・ハワードの現場は前向きなオーラであふれている。ロンは一つひとつのプロセスに、一人ひとりのキャラクターに入れ込むからね。映画作りにかけるあの情熱と歓喜は全員に伝染する。それがロンから得られるものなんだ」

世代の違う2人の俳優が30年前のトーマス・ニカーソンと現在のニカーソンをそれぞれ演じている。若手のトム・ホランドが扮するのは14歳のニカーソン。エセックス号には給仕として乗船し、初めて捕鯨を体験する。ベテランのブレンダン・グリーソンは30年後のニカーソンを好演。今も当時の傷を引きずっているが、そのほとんどは目に見えない心の傷だ。

監督のハワードが説明する。「２人のニカーソンを契機として個々のエピソードが明かされるんだ。どの話も興味深くて、胸を打つ。少年の目から見た航海の危険やスリル、ニカーソンの記憶に刻まれた悲しいトラウマも語られるんだ」 トム・ホランドは、自身が演じる十代のニカーソンについて「こんなにタフな子供は見たことがないよ」と言う。「ニカーソンは孤児で、身寄りがない。怖いもの知らずのベテラン漁師に交じって海に出るんだ。だけど、本当は自分が何をしているのか検討もつかない。右も左も分からないまま、とりあえず船に乗るんだけれど、行く手に何が待ち受けているかは知るよしもないんだ」

それから30年後。いまやニカーソンはエセックス号のメンバーの最後の生き残りになった。そして、片時も忘れることができなかった忌まわしい出来事を打ち明けるように迫られる。「おぞましい光景を目の当たりにしたとき、ニカーソンはまだ子供だったんだ」と老境のニカーソンを演じるグリーソンは言う。「ニカーソンはそのとき味わった恐怖を誰にも話さずに生きてきた。それは長年封印してきた事実であり、今もニカーソンをひどく苦しめている。そんな彼がやっと口を開く気になり、封印してきた事実と向き合うんだ。そして、ようやく過去の呪縛から解き放たれる」

当時の話を聞かせてほしいとニカーソンに頼み込む人物がいる。ハーマン・メルヴィルという名の若い作家だ。脚本のチャールズ・レビットは本作の構成を考えるにあたり、「エセックス号の史実に架空の物語をブレンドさせたかった」と明かす。「その架空の物語とは、メルヴィルがアメリカ文学の傑作『白鯨』を生み出したいきさつです。この映画はニカーソンの視点で話が進行しますが、メルヴィルの想像の部分がどこから始まるのかは察しがつくと思います」

ベン・ウィショーが、今では伝説の作家となったメルヴィルを好演している。「この映画はハーマン・メルヴィルが真実を追い求めるところから始まるんだ」とウィショーは言う。「メルヴィルは巷の噂を聞きつけ、エセックス号の一件には隠れた真実があるのではないかとにらむ。僕の役どころは、ある意味、ストーリーの促進剤じゃないかな。メルヴィルとニカーソンの間で明かされるのは、いわば、心に秘めた闇だね。２人のやりとりは夜通し続き、それが終わるころには新しい光の下でお互いの姿を見ることになる」

しかし、ニカーソンも妻（ミシェル・フェアリー）の支えがなかったら、真実を打ち明けることはなかったかもしれない。「ニカーソンの妻はメルヴィルを促し、夫に真実を語らせようとする。そうすることが夫婦にとって唯一の救いになると信じているんだ」とニカーソン役のグリーソンは言う。「妻はその真実がどの程度のものか、よく分かっていない。けれども、夫婦の間に影を落としてきた秘密や心を閉ざした夫と暮らしてきたんだ」「このストーリーは捕鯨船員の家族の女性にも深い関わりがある」と監督のハワードは言う。「ナンタケット島の捕鯨の歴史を紐解けば、真のサバイバーは女性であることが分かるよ。男たちが数年単位で漁に出るたびに、女性は留守を守ってきた。家事や育児だけではなく、島全体を切り盛りしていたんだ」

シャーロット・ライリー扮するペギーはオーウェン・チェイスの愛情豊かな妻だ。チェイスが「必ず帰ってくる」と約束して海に出て行ったとき、ペギーは第一子を身ごもっていた。監督のハワードは「映画の冒頭に描かれるオーウェン夫婦の姿はオーウェンを理解するうえで欠かせないポイントなんだ。ストーリーが終盤に入り、オーウェンたちが家路を目指すころには、人生には自分の命以外にも大事なものが山ほどあることが分かる。大切なのは家族、そして愛する女性だからね」

ポラードやチェイスと航海を共にするのはカレブ・チャペル（ポール・アンダーソン）、ニカーソンの十代の友人バルジライ・レイ（エドワード・アシュレイ）、エセックス号の料理番ウィリアム・ボンド（ゲイリー・ビードル）、ラムズデル（サム・キーリー）、リチャード・ピーターソン（オシー・イクハイル）、ベンジャミン・ローレンス（ジョゼフ・マウル）、ポラードのいとこで名家出身のヘンリー・コフィン（フランク・ディレイン）。また、ジョルディ・モリャが、白鯨と遭遇した経験をもつスペインの捕鯨船の船長に扮し、エセックス号の船員たちに行く手に危険が待ち受けていることを警告する。

怪物は――

実在するのか？

または海を畏怖させるための

作り話なのか？

〈白い鯨〉

言うまでもなく、白鯨は本作のメインキャストの一人だ。そこで、この鯨の制作には本作の各部署と外部の専門家が共同であたることになった。「マッコウクジラの生態をチームを組んで研究、分析したんだ」と監督のハワードは振り返る。「海洋哺乳類や海洋生物学の専門家にも話を聞いて、理解を深めるように努めたよ。僕が興味を惹かれたのはこういう事態に至った“理由”だった。鯨が船をしつこく攻撃するなんていう話は前代未聞だし、こんなに恐ろしいことはない。この鯨は追い詰められた末に人間を襲うしかなかったんじゃないか……僕にはそう思えてきたんだ」

美術のマーク・ティルデスリーが説明する。「作中に登場する白鯨にはリアルな存在感を与えることが命題でした。白肌の鯨の画像をいくつか見てみましたが、全身が白一色だと、見栄えはするけれども幻想的で穏やかな印象を与えてしまう。ところが、調べてみたら、年長の鯨の多くは皮膚がはがれ落ちることが分かった。そこで、白鯨の体色を一段暗くすることにしました。でも、よく見ると、皮膚がはがれてまだらになった部分に白い肌がのぞいています」

「この白鯨には古傷もあります。それは人間や天敵と格闘したときに付いたもの。この鯨の全身は激しい戦歴を物語っているんです」と視覚効果制作のレスリー・ラーマンは話す。

本作の白鯨はCGによって誕生した。CGを担当したのはラーマン率いる視覚効果チームで、その監修にジョディ・ジョンソンがあたった。「これだけの巨体とパワーをもつ動物を制作するわけですから、さじ加減がとくに難しかった。スケールを出し過ぎると、観ている人は現実感がなくなり、おとぎの世界に入ってしまう。それだけは避けたかったんです。主役の白鯨であれ、普通の鯨であれ、鯨が登場する場面のコンテはすべて専門家に目を通してもらいました。リアルな動きをしているか、ほかに付け加えられる点はないか、意見を仰いだんです。専門家のアドバイスを頂戴したおかげで作業の範囲が広がりました」

この白鯨がけた違いであることは、その大きさに見て取れる。全長約30メートル、重さ約80トン。尾だけでも6メートル近くある。それに比べて、作中に出てくる他のオスのマッコウクジラは全長約16メートルで、白鯨の半分ほどだ。

しかし、この鯨を際立たせているのは大きさだけにとどまらない。製作のポーラ・ワインスタインは「私にとって、この白鯨は『いい加減にしてくれ！』という自然の叫びに思えます」と話す。「彼は自分の縄張りや家族をこれ以上奪われないように、唯一の防衛手段で人間に訴えているのでしょう。それは今の時代をかんがみても非常に大切なメッセージです。観客はチェイスやポラードや船員たちが無事に帰還できることを願いながらも、この鯨を応援したくなると思います。複雑な思いに駆られるから、ますますスクリーンから目が離せません」

鯨油が街灯の燃料として

重宝されて以来――

世界的に需要が急増

男たちは捕鯨船に乗り込み

未知なる大海を目指した

〈陸と海での撮影〉

本作はほぼ時系列に沿って撮影されたが、それにはいくつか事情がある。主な理由は登場人物の容姿の変化だ。船員たちは厳しい自然環境にさらされ、水や食料や雨風をしのぐ場所にも事欠き、日に日にやつれていく。

エセックス号の沈没後、生き残った船員たちの風貌は劇的に変わる。そのため、キャストは撮影期間を通して、かなりの減量を強いられた。チェイス役のクリス・ヘムズワースが振り返る。「船員たちは何カ月も海の上を漂流していたから、発見されるころには基本的に骨と皮だけになっていた。僕たちキャストも食べる量は必要最小限に抑えたけれど、彼らが味わった苦しみとは比較にならない。キャスト全員が心をひとつにしてモチベーションを保ち、空腹をまぎらわすように努めたよ」

十代のニカーソンを演じたトム・ホランドも「グループダイエットほど男同士の絆を強くするものはないね。そのおかげで撮影現場で団結できたよ。それは本当に心強かった」「減量を始めたころは適度な競争意識も働いたけれど、そのうち辛くなってきたよ」とポラード役のベンジャミン・ウォーカーは明かす。「だけど、みんなで冷静になろうと努力したんだ。ピザやチーズバーガーは我慢しなくちゃいけないけれど、その見返りは充分にある。なんたってロン・ハワードの映画に参加しているんだからね。それに、ある程度の辛さに耐えることで、過酷な状況を生き抜いた人たちへのオマージュになるような気がしたんだ」

監督のハワードはキャストの忍耐力を絶賛する。「俳優たちのプロ意識と頑張りには心から感謝してるんだ。連日、空腹に耐えながら、きつい撮影に臨んでくれた。初めから苦行は承知の上だったけれど、それでも俳優たちは役づくりのためにどんなことでも真剣に取り組んでくれたんだ」

しかし、いくら役づくりのためとはいえ、健康を損ねるわけにはいかず、減量するにも限度があった。そこで出番となったのがヘアメイク・デザイナーのフェイ・ハモンド率いるメイク・チームだ。メイクの力で栄養状態の悪化を強調し、キャストが徐々に衰弱していくさまを表現。また、脱水症状や長期間の紫外線による影響も演出した。

また、視覚効果チームはデジタル技術を駆使し、キャスト一人ひとりの筋肉を入念に削って体格を変化させた。これにより、漂流生活も終盤を迎えるころには全員がそれらしい体つきになった。 衣装の調整も一役買っている。「衣装そのものを大きめに作り、背中に帯状のパッドを入れました」と衣装のジュリアン・デイは言う。「最初はパッドを入れたままにしておき、ストーリーが進行するにつれて、パッドを抜いていく。そうすると衣装がだんだんブカブカになって、それを着ている俳優の体形も違って見えるんです」

極限下にある男たちの変化は肉体のみならず精神にも表れる。製作陣は、キャストが漂流生活のあらゆる影響を把握できるように海洋サバイバル・コンサルタントのスティーヴン・キャラハンを招いた。航海のベテランでもあるキャラハンはかつて大西洋で難破し、救命いかだで2カ月半も漂流した。そのときの体験は自著「大西洋漂流76日間」（ハヤカワ・ノンフィクション文庫　刊）に記されている。キャラハンいわく、サバイバル体験が与える影響はいつの時代も変わらないとか。「キャストのみなさんがサバイバルの方法を身につけていく過程を興味深く見守りました。とくに体の状態が心のコンディションに与える影響に注目しましたよ。あの独特の緊張感、絶望と希望の間をたえず行き来する心理は昔も今も変わりません」

その反対に、出航時のシーンを演じるときは捕鯨船員という職業柄、たくましい体で撮影に臨まなければいけなかった。チェイス役のクリス・ヘムズワースが言う。「船乗りが海に出るのは戦場に向かうのと同じなんだ。一度、港を出たら2～3年は海の上だし、二度と戻ってこられない可能性も高い。言ってみれば、つねに臨戦態勢だね。それほど危険と隣り合わせなんだよ」

ジョイ役のキリアン・マーフィーがつけ加える。「監督のロンが僕たちに最初に指示したのは体を絞り、海の男にふさわしい肉体になること。だから、セットにジムを用意してもらって全員でトレーニングに励んだんだ」 十代のニカーソンに扮するトム・ホランドは「僕だってクリス・ヘムズワースの横で体を鍛えたよ。妙な鍛え方だったけどね。僕のトレーニングはクリスのバーベルからウエイトを外すことだったんだ（笑）」

さらにキャストは19世紀のベテラン船員として手際の良さを披露しなくてはいけなかった。スタント・コーディネーターのユーニス・ハットハートが説明する。「いちばん大切な課題のひとつが船上での作業を余すところなく習得することでした。一部の作業は現在でも通用します。撮影が終わるころには、キャスト全員がボートで世界一周できるくらいの技術を身につけたと思います。貴重な訓練のたまものですよ」

ウィリアム・ボンド役のゲイリー・ビードルが訓練の内容を明かす。「索具の装備やロープの結び方を練習したんだ。あとはボートをたくさん漕いだよ。オールを前に後に、前に後に動かして、リズムをつかむ。今なら英仏海峡をボートで渡れるんじゃないかな（笑）」

ベンジャミン・ローレンス役のジョゼフ・マウルは「僕にとっていちばんの難題は甲板から12メートルの高さにある帆桁までよじ登り、帆桁を伝い歩きしながら端まで移動することだった。難なくこなすキャストもいたけど、僕の場合、最初の数回は足がすくんでしまったよ。高い所は昔から苦手だけど、最後は成功した。恐怖心を克服できて嬉しかったね」

しかし、高所に上がっても心配するには及ばなかった。ヘンリー・コフィン役のフランク・ディレインが証言する。「上

り下りするときは必ず命綱を付けてもらったんだ。練習を積んだあとでもスタント・チームが安全を確保してくれたから、万一落下しても、どこかに飛んでいく心配はなかったよ」

一連の面倒な作業を免除されたキャストが一人いる。ポラード船長を演じるベンジャミン・ウォーカーだ。「ロープの結び方や索具の扱いやボートの漕ぎ方は一通り教わったけれど……僕はどれも実演しなくてすんだんだ。そこが船長役の特権。ただ偉そうに指示を出して、船員のミスを注意するだけでいいんだから」とウォーカーは笑った。

新任の船長と船員との差は身なりを見ても明らかだ。ポラードの真新しい制服には波しぶきの一滴も付いていないが、船員の服は長年の船上生活による年季を感じさせる。

「初航海のポラード船長はこざっぱりした格好をしていますが、それにひきかえ船員の身なりは、何年も着古したのか、ヨレヨレです」と衣装のジュリアン・デイは話す。「監督のロンにも相談したのですが、彼らは船員というよりエ員に近いのではないかと考えて、それをデザインに反映させたんです。衣装を水から保護するために、生地には撥水効果のあるコットンダックやワックス加工を施したものを選びました。海上でのアクションが多いので、靴には革ではなく合成素材を使用。革靴は水に濡らすと硬くなって、二度と履けなくなりますから」

捕鯨船員の服装に決まりはなかったが、「一人ひとりにブルー系の上着をしつらえました。ブルーは海と空を象徴する色です」とデイは言う。「上着の下に合わせるものはキャストによってまちまちですが、サイズやデザインの違うブルーのジャケットを全員に着せることで統一感を出したかったんです」

全員に共通するアイテムがもうひとつある。当時の捕鯨船員がよくかぶっていたモンマス帽だ。デイはこのニット帽に詳しいニットデザイナーを見つけ、エセックス号に乗船するキャスト一人ひとりに本場のモンマス帽を編んでもらった。

作中に登場するエセックス号には実物の帆船とレプリカが使用された。前者は海上、後者は英リーブスデン・スタジオの撮影用プールに浮かべられた。

「帆船のリサーチには時間をかけました」と美術のマーク・ティルデスリーは振り返る。「もちろん当時は写真のない時代でしたから、帆船のイメージは絵画やイラストなどから拾ったんです。米コネチカット州ミスティックの海洋博物館にも行きました。あの博物館には現存する唯一の捕鯨船チャールズ・W・モーガン号が展示されている。完全に修復されていたので大いに参考になりました」

続いてティルデスリーはエセックス号に見立てる帆船を探した。エセックス号は全長約30メートル。船内は複数のセクションに分かれており、船長室、船員の私室、鯨油の樽を保管する下げ甲板などがある。また、エセックス号は9メートルほどの捕鯨ボートを4～5隻積んでいた。この手漕ぎボートを海に降ろすのは、獲物を発見した見張り番が「吹いたぞ！」と叫ぶときだ。

ティルデスリー率いる美術チームは条件に合う帆船を求めて国内外に目を向けたが、まもなく見つけることができた。「目をつけた帆船のほとんどは数年先まで先約が入っていました。ですが幸いにも、英コーンウォールでフェニックス号という一隻が見つかったんです。サイズはエセックス号と同じくらいですが、マストの数がエセックス号は3本なのに、こちらは2本しかない。そこは小さな妥協でした」

美術チームはフェニックス号のレプリカを建造。そしてリーブスデン・スタジオの屋外プールの中央に台座を設置し、その上にレプリカの帆船を載せた。「スタッフが作業しやすいように、レプリカは大きめに造りました」とティルデスリーは言う。「フレームは鉄製ですが、目に付くもの――帆からマストに至るまで本職のメーカーに制作してもらいました。ですから、どこから見ても外側は本物の帆船にそっくりです」

しかし、内側となると話は別だ。マーク・ホルト率いる特殊効果チームはこのレプリカに複数のタンクを取り付けた。タンク内の水量を加減することで浮力を調整し、船体を傾けたり、沈めたりできる。また、レプリカを載せた台座のアームを動かし、船体を揺らした。この仕掛けが大活躍したのは、ポラード船長が船員の士気を試すために、迫り来る嵐に向かって直進を命じるシーンだ。

特殊効果チームの尽力によって、キャストはあまりにもリアルな体験を味わった。「水上の絶叫マシンに乗っているような気分だった」とポラード役のベンジャミン・ウォーカーは言う。「初めは楽しいんだけれど、そのうち巨大な送風機が回り出し、高圧放水が始まる。続いてロンが『スタート！』と声を掛け、役者はようやく演技に入るんだ。せめてもの救いは同乗の仲間がいたことだね」

チェイス役のクリス・ヘムズワースは「撮影は冬のさなかに行われたから、けっして快適な環境とは言えなかった」と明かす。「監督のロンですら、『ただでさえ悲惨な状況だから、演技の必要はない』なんて言ってたし（笑）。これほどしんどい撮影は初めてだったけれど、やりがいも最高だった。ロン・ハワードがあのスタミナと熱意で引っ張ってくれるから、キャストもスタッフもついていく。誰もロンの期待を裏切りたくなかったからね」

製作のブライアン・グレイザーも長年のパートナーに賛辞を惜しまない。「ロンとのつき合いは33年になりますが、その才能には今も惚れ惚れします。大きなプールで撮影したときは不確定要素がいくつもありました――送風機、造波装置、台座の上に載せた何隻ものボート、多種多様なカメラ、視覚効果。それでもロンは水を得た魚のように熟練ならではの手腕をフルに発揮していました。あの純粋な名人芸を見るのは今でも楽しみです」

エセックス号に見立てた帆船と同様に、小ぶりの捕鯨ボートも本職のボート工が手がけた。まずは木製のボートを造り、その型を取ってファイバーグラスで仕上げた。「木造ボートは重くて持ち上げにくいので、撮影には不向きでした」と美術のティルデスリーは話す。「ですが、完成したボートは木材でコーティングしましたから、見た目は木造そのものです」

帆船にもボートにも複数台のカメラが設置された。それは海上ロケでもプールを使った撮影でも変わらなかった。その結果、監督のハワードや撮影のアンソニー・ドッド・マントルの狙いどおり、観る者は迫力のアクションを目のあたりにしている気分になる。ハワードが振り返る。「アンソニーのビジュアルセンスは秀逸で、この史実に現代的な感覚を注入してくれたよ。カメラを船に同乗させたことで、かなりの躍動感と臨場感が出ている。観客には、キャストの隣に座っている気分で体験を分かち合ってほしいね」

船上には照明やカメラといった現代の撮影機材が所狭しと置かれた。そこで美術のティルデスリーは一計を案じ、機材のコード類を隠すことに成功。コードをゴム索で覆い、それとは気付かれないように工夫した。

その後、撮影隊はラ・ゴメラ島に移動。カナリア諸島に属するこの小島は初めて映画の舞台になった。エセックス号に見立てた帆船はイギリスから海を渡ってラ・ゴメラ島に到着。その途中、視覚効果チームは帆船のデッキから海面の様子を撮影することができた。映像には時刻や天候によって変わる海の表情が収められている。その貴重な映像はのちに実景として使われ、海上で展開するシーンに華を添えた。

ラ・ゴメラ島の景観は撮影隊が必要としたビジュアルをことごとく提供してくれた。なかでも、穏やかな青い海は圧巻だ。撮影隊が拠点にしたのはプラヤ・サンティアゴの小さな港。ここからキャストを乗せたエセックス号が出帆し、その周辺を撮影、輸送、ヘアメイク、ケータリングの各ボートが取り囲んだ。ラ・ゴメラは全島を挙げて撮影隊を歓迎し、多くの住民はスタッフとして雇われた。

撮影隊はこの島で5週間に及ぶ海上撮影を敢行したあと、カナリア諸島のテネリフェ島に移動し、現地のビーチで一週間かけて無人島のシーンを撮影した。ロケーションに選んだヤイザ地区のエル・ゴルフォには独特の形状の岩や、かつての活火山によって誕生したエメラルドグリーンの美しい礁湖がある。

撮影の最後をしめくくったのは、19 世紀の捕鯨の要衝ナンタケット島を舞台にした主要なシーンだ。映画の冒頭に描かれるのは 1850 年のナンタケットの港町。メルヴィルがトム・ニカーソンを探し当て、訪ねて来る。続いて、話は 1819 年8月にさかのぼり、エセックス号は最後の航海に出て、まもなく伝説になる。その後、舞台は 1850 年に戻る。メルヴィルは切望していた題材を得てニカーソンの家をあとにし、のちに広く読み継がれる不朽の名作を執筆することになる。

スタッフはナンタケットの面影を探してイギリス中の港町をロケハンした。しかし、19 世紀の雰囲気を再現することはできても、建造物は米ニューイングランドのそれとは似ても似つかなかった。そこで「リーブスデン・スタジオに港町全体のセットを建設することにしました。撮影用のプールを港に仕立てたんです」と美術のティルデスリーは言う。

ナンタケット島のシーンは 30 年の年月を挟んで展開するため、美術チームはセットの装飾を2パターン用意する必要があった。作中に出てくる 1819 年のナンタケット島は路面に土ぼこりが舞い、ビルもまばらだ。しかし、約 30 年後の町並みは時代の進化を感じさせる。「路面に石を敷きつめ、その中央に線路を設置しました。機械化の流れを映し出すためです」とティルデスリーは言う。「港には汽船も見えます。世の中は蒸気の時代に入りましたからね」

このセットの周囲にはブルースクリーンが張り巡らされた。撮影後は視覚効果チームがティルデスリーの美術デザインを生かし、いにしえのナンタケットの景観を、地平線に至るまで、CGで制作した。

原作者のナサニエル・フィルブリックは、このセットを訪れて目を見張った。「僕と妻はナンタケット島に住んで28年になります。島を出て、セットに一歩入ったとたん、1800年代のナンタケットが目の前に広がっていた。圧倒されましたよ。この小島が世界中の明かりを灯していたのかと思うと感慨深いですが、当時は鯨そのものに目が向いていなかった。現在のナンタケットは島の歴史を誇りにしながらも、鯨に対する意識が 180 度変わりました。鯨を保護するためなら何でもする覚悟です。それは過去に学び、願わくば未来につなげるために大切なことだと思います」

主要な撮影を終えたロン・ハワードだったが、「その後の工程も一筋縄では行かなかった」と告白する。「すべてはバランスが勝負だったからね。新旧のバランス、古典と先進のバランス……それを加減することは僕自身にも、編集のダン・ハンリーやマイク・ヒルにも、そして、みごとなサウンドを提供してくれたロケ・バニョスにも難題だったよ」

ハワードが続ける。「ロケ・バニョスとは撮影中に会って話をしたんだ。そのとき、僕が表現したかった伝統と現代性とのブレンドについて伝えたよ。ロケはクラシック音楽の素養がある名作曲家だし、幅広いジャンルの映画を手がけてきたから、この作品の冒険とドラマをすべて掘り下げてくれると信じていた。その読みは当たったね。今回のサウンドトラックは、とてつもない迫力と情感にあふれている」

バニョスはいにしえの海上に耳を傾け、既存の楽器にとらわれることがなかった。「ロケは撮影に使った小道具を打楽器にしたんだ」とハワードが証言する。「銛とか、ロープとか、砥石とか、当時の漁の道具をね。その音色がオーケストラの演奏と相まって、このストーリーならではの個性を吹き込んでいる」

ハワードは最後にこう言った。「この作品では時代の垣根を取り払いたかった。観ている人には目の前で起きていることとして登場人物に共感してほしいし、ストーリーに浸ってほしい。この世界に観客を引き込み、海の冒険を体験してもらうために、これまでのキャリアで身につけたことはすべて出し切ったつもりなんだ。冒険を体感することで、ドラマの部分も深く味わってもらえるんじゃないかな。エセックス号にまつわる人間ドラマは、この先もずっと、まったく思いがけない場面で僕たちを鼓舞してくれると思うよ」

キャスト

クリス・ヘムズワース（オーウェン・チェイス）CHRIS HEMSWORTH（Owen Chase）

ハリウッドで引く手あまたの俳優のひとりである。2012 年、全米興行収益歴代第4位となった、マーベル・コミックに基づく『アベンジャーズ』で、ロバート・ダウニー・Jr.、サミュエル・L・ジャクソン、スカーレット・ヨハンソンら豪華キャスト陣と共演した。また同年、公開週末の興収が1位に躍り出た『スノーホワイト』（12）にも出演。16 年に、続編『The Huntsman Winter's War』（シャーリーズ・セロン、ジェシカ・チャステイン、エミリー・ブラント共演）でタイトルロールを演じる。

ケネス・ブラナー監督の 11 年のヒット作『マイティ・ソー』に、ハンマーを手にしたスーパーヒーロー、ソー役で登場。その後、続編『マイティ・ソー／ダーク・ワールド』（13）でもソーを再演した。また、本作の監督であるロン・ハワードとは、F1ドライバーのジェームズ・ハントを演じた『ラッシュ／プライドと友情』（13）でもチームを組んだ。近作に、世界中を席巻した「アベンジャーズ」シリーズ第2弾『アベンジャーズ／エイジ・オブ・ウルトロン』（15）がある。

オーストラリアで生まれ育った。J・J・エイブラムス監督の『スター・トレック』（09）で、重要な役ジョージ・カークを演じ、米国映画界にデビュー。ほかの出演作に、ジョス・ウェドン脚本の『キャビン』（12）、『若き勇者たち』（84）のリメイク版『レッド・ドーン』（12）、コメディ『お！バカんす家族』（15）、マイケル・マン監督の『ブラックハット』（15）などがある。

オーストラリア児童基金の支援など、さまざまなチャリティー活動をおこなっている。

ベンジャミン・ウォーカー（ジョージ・ポラード）BENJAMIN WALKER（George Pollard）

2004 年、名門ジュリアード学院演劇科を卒業。07 年、リバイバル作品「風の遺産」（クリストファー・プラマー、ブライアン・デネヒー共演）で被告人バートラム・ケイツを演じ、ブロードウェイデビューを飾った。満員御礼の 10 週連続公演がおこなわれた同作は、トニー賞4部門にノミネートされた。翌 08 年、ランドアバウト・シアター・カンパニーのトニー賞ノミネート作品「危険な関係」でローラ・リニーと共演した。

ロサンゼルスのカーク・ダグラス・シアターでワールドプレミア公演がおこなわれたミュージカル「Bloody Bloody Andrew Jackson」で、主人公のアンドリュー・ジャクソンを演じた。その後、初のオフブロードウェイ公演となるニューヨークのパブリック・シアター、そしてブロードウェイの舞台で同じ役を再演した。近作には、ブリック役でスカーレット・ヨハンソンと共演したブロードウェイ・リバイバル作品「熱いトタン屋根の猫」(テネシー・ウィリアムズ作)がある。

ビル・コンドン監督の高い評価を受けた伝記『愛についてのキンゼイ・レポート』(04／リーアム・ニーソン、ローラ・リニー共演)で長編映画デビューを飾った。さらに初期のころの出演作に、『ベティ・ペイジ』(05)、硫黄島に星条旗を揚げる兵士たちの象徴的な写真に写っているハーロン・ブロックを演じた、第二次世界大戦を描いたドラマ『父親たちの星条旗』(06／クリント・イーストウッド監督)がある。

ほかの出演作に、『The War Boys』(09)、リンカーンを演じた『リンカーン／秘密の書』(12)、モハメド・アリが良心的兵役拒否者であると認定されるに至った法的文書を記録した最高裁判所の事務官ケビン・コナリーを演じた、『Muhammad Ali's Greatest Fight』(13／スティーブン・フリアーズ監督)などがある。

さらに、インディペンデント映画『The Moon and the Sun』(ウィリアム・ハート、ピアース・ブロスナン共演)、『Look Away』(クロエ・セビニー、マシュー・ブロデリック共演)、『The Choice』(テレーサ・パーマー共演)など多くの待機作が控えている。

キリアン・マーフィー(マシュー・ジョイ)CILLIAN MURPHY(Matthew Joy)

TVドラマや、ロンドン、ニューヨークをはじめ世界中の舞台での活躍に加え、大手スタジオ系のヒット作と賞受賞インディペンデント映画の両方に出演。BBC2 放送の高い評価を得たドラマシリーズ「ピーキー・ブラインダーズ」(スティーブン・ナイト企画)の第1～第2シーズンの 12 エピソード(13～14)に出演。現在、第3シーズンを製作中である。米国ではネットフリックスで視聴できる。同ドラマの撮影がオフの間に、犯罪ドラマ『Free Fire』(ベン・ウィートリー監督)と第二次世界大戦を舞台にしたサスペンス『Anthropoid』(ショーン・エリス監督)の撮影を終えた。

ダニー・ボイル監督の『28 日後…』(02)で、無気力な生存者ジム役を演じ、国際的に注目を集めた。2005 年、クリストファー・ノーラン監督の『バットマン ビギンズ』でジョナサン・クレイン博士(通称スケアクロウ)を演じて強烈な印象を残し、ロンドン映画批評家協会賞にノミネートされた。その後、ノーラン監督の大ヒット作『ダークナイト』(08)と『ダークナイト ライジング』(12)でも同役を演じた。また、高い評価を得たヒット作『インセプション』(10)でも同監督とタッグを組み、億万長者の法定相続人役を演じた。

ニール・ジョーダン監督の『プルートで朝食を』(05)では、性同一性障害の落ちこぼれパトリック・"キトゥン"・ブレイデン役を演じ、ゴールデングローブ賞にノミネートされた。その後、ケン・ローチ監督の 06 年度カンヌ国際映画祭パルムドール賞受賞作『麦の穂をゆらす風』とダニー・ボイル監督と再タッグを組んだ 07 年のSFサスペンス『サンシャイン 2057』で2年連続して英インディペンデント映画賞最優秀男優賞部門にノミネートされた。さらに、『ブロークン』(12・未)は、同賞最優秀作品賞を受賞し、自身も最優秀助演男優賞部門で同賞に3度目のノミネートを果たした。この作品は、12 年度カンヌ国際映画祭国際批評家週間でプレミア上映された。

そのほか、『オン・エッジ 19 歳のカルテ』(01・未／ジョン・カーニー監督)、『ダブリン上等！』(03／ジョン・クローリー監督)、『真珠の耳飾りの少女』(03／ピーター・ウェーバー監督)、『コールド マウンテン』(03／アンソニー・ミンゲラ監督)、サスペンス『パニック・フライト』(05・未／ウェス・クレイブン監督)、『*Perrier's Bounty*』(09)、『TIME／タイム』(11／アンドリュー・ニコル監督)、『レッド・ライト』(12／ロドリゴ・コルテス監督)、『Aloft』(14／クラウディア・リョサ監督)など、幅広いジャンルの作品に出演している。

また、定期的に舞台に出演しており、アイルランドの脚本家エンダ・ウォルシュとたびたびコラボレートしている。最近では、ウォルシュの戯曲「Ballyturk」のワールドプレミア公演に出演。同作は、ゴールウェイ国際芸術祭で上演されたのち、ロンドンのナショナル・シアターで上演された。

ウォルシュ作「Disco Pigs」で見事な演技を披露し、頭角を現した。96 年度ダブリン演劇祭のフリンジショーと 97 年度エジンバラ演劇祭のフリンジファースト部門で絶賛された同作は、広く、アイルランド、イギリス、カナダ、オーストラリアにツアーを敢行。のちに、カーステン・シェリダンが監督した映画版にも出演した。その後、ゴールウェイ国際芸術祭で上演されたウォルシュ作「Misterman」のオリジナル作品で、アイリッシュ・タイムズ賞最優秀男優賞を受賞

した。また、ブルックリンのセント・アンズ・ウェアハウスで上演された同作では、12 年度ドラマ・デスク賞最優秀ソロ演技賞を受賞。そののち、同作のナショナル・シアター公演にも出演した。

06 年、ジョン・コルベンバック作、ジョン・クローリー演出の「ラブ・ソング」でウエストエンド・デビューを飾った。トニー賞受賞歴をもつ演出家ギャリー・ハインズとは「The Country Boy」「ジュノーと孔雀」、ダブリンのゲイエティ・シアターで上演された「西国の伊達男」などの作品で何度もコラボレートしている。また、エジンバラ演劇祭で上演された「かもめ」、ダブリンのゲートシアターで上演されたニール・ラビュート作「The Shape of Things」、キルケニー城で上演された「恋のから騒ぎ」にも出演した。

ベン・ウィショー（ハーマン・メルヴィル）BEN WHISHAW（Herman Melville）

ヒット作「ジェームズ・ボンド」シリーズ『007 スカイフォール』（12）で、英国諜報機関 MI6 の天才コンピューターおたくQ役を演じた。同シリーズ最新作『007 スペクター』（15）でもQ役でボンド役のダニエル・クレイグと共演している。ほかの近作には、『Suffragette』（15／キャリー・マリガン、メリル・ストリープ共演）、カンヌ国際映画祭でプレミア上映されて好評を博した『The Lobster』（15）、『リリーのすべて』（15／エディ・レッドメイン共演）などがある。

舞台と映画の両方でさまざまな賞を受賞している。絶賛を浴びた『アイム・ノット・ゼア』（07／ケイト・ブランシェット、クリスチャン・ベイル、リチャード・ギア、ヒース・レジャー共演）で、インディペンデント・スピリット賞の栄えあるロバート・アルトマン賞をトッド・ヘインズ監督や共演者たちと分かち合った。キャリア初期のころ、『My Brother Tom』（01）で英インディペンデント映画賞を受賞し、数々の映画祭でも賞に輝いた。

これまでに、トム・ティクバ監督とは、主役のジャン＝バティスト・グルヌイユを演じた『パフューム ある人殺しの物語』（06）を皮切りに、アクションサスペンス『ザ・バンク 堕ちた巨像』（09）、ティクバとウォシャウスキー兄弟との共同監督作『クラウド アトラス』（12）でコラボレートしている。このほか、ロジャー・ミッシェル監督の『Jの悲劇』（04）、マシュー・ボーン監督の『レイヤー・ケーキ』（04）、キース・リチャーズを演じた『ブライアン・ジョーンズ ストーンズから消えた男』（05）、ジュリアン・ジャロルド監督の『情愛と友情』（08・未）、ジェーン・カンピオン監督の『ブライト・スター ～いちばん美しい恋の詩（うた）～』（09）、ジュリー・テイモア監督の『テンペスト』（10）などに出演。また、『パディントン』（14）では、パディントンの声を演じた。

TVでは、BBC 放送のシリーズ「Criminal Justice」の第1シーズンの全5エピソード（08）に出演し、国際エミー賞と英国王立TV協会賞の最優秀男優賞を受賞し、英アカデミーTV（BAFTA TV）賞最優秀男優賞にノミネートされた。近年では、「The Hollow Crown」の1エピソード（12）でリチャード二世を演じ、BAFTA TV賞最優秀男優賞に輝いた。ほかの出演作に、TV映画「The Booze Cruise」（03）、ドラマシリーズ「Nathan Barley」の6エピソード（05）、「THE HOUR 裏切りのニュース」の第1～第2シーズンの 12 エピソード（11～12）、「London Spy」の5エピソード（15）などがある。

舞台では、オールド・ビックで上演されたトレバー・ナン演出の鮮烈な若者版「ハムレット」でハムレットを演じ、オリビエ賞にノミネートされた。また、ナショナル・シアターで上演された出演作には、フィリップ・プルマン原作の舞台版「ライラの冒険」、ケイティ・ミッチェル演出の 06 年の「かもめ」（チェーホフ作）、主役を務めた 08 年の「白痴」などがある。このほか、ウエストエンドでは、「Cock」、ジュディ・デンチ共演の「Peter and Alice」（ジョン・ローガン作）、「Mojo」（ジェズ・バターワース作）などに出演した。最近、「バッコスの信女」のアルメイダ・シアター公演が千秋楽を迎えた。

英国ハートフォードシャー州出身。03 年、英国王立演劇アカデミーを卒業。

トム・ホランド（トーマス・ニカーソン）TOM HOLLAND（Thomas Nickerson）

最近、アクションアドベンチャー『Captain America: Civil War』の撮影を終えた。2016 年春に公開予定の同作で、ピーター・パーカー／スパイダーマンを演じている。さらに待機作に、『The Lost City of Z』（チャーリー・ハナム、シエナ・ミラー、ロバート・パティンソン共演）、インディペンデント映画『Pilgrimage』と『Backcountry』などがある。

高い評価を受けた実話ドラマ『インポッシブル』（12／ナオミ・ワッツ共演）で、華々しく映画デビューした。同作で、04 年の壊滅的な津波から生き残った少年を演じ、ロンドン映画批評家協会賞、全米映画批評会議賞、エンパイア賞をはじめ、数多くの栄誉に浴した。その後、『わたしは生きていける』（13）に出演。

俳優に加え、ダンサーとしても活躍。ヒットミュージカル「ビリー・エリオット ミュージカルライブ／リトル・ダンサー」のステージに立ち、有名になった。08 年6月、ビリーの親友マイケル役でウエストエンド・デビューを飾り、同年9月に主人公のビリー役を射止めた。ふたりの若手俳優が交替で主役を演じていたが、10 年3月、同ミュージカル5周年記念公演ではビリーを演じた。10 年3月、同ミュージカルを卒業した。

ブレンダン・グリーソン（トム・ニカーソン）BRENDAN GLEESON（Tom Nickerson）

2014 年度サンダンス映画祭でプレミア上映された、ジョン・マイケル・マクドナー監督の『ある神父の希望と絶望の7日間』（未）でジェイムズ神父を演じ、英インディペンデント映画賞最優秀男優賞に輝いた。また、マクドナー監督／脚本の『ザ・ガード ～西部の相棒～』（11・未）では、ゴールデングローブ賞、イブニング・スタンダード賞、ロンドン映画批評家協会賞にノミネートされた。さらに、サラ・ガブロン監督の『Suffragette』（15／メリル・ストリープ、キャリー・マリガン共演）で、英インディペンデント映画賞最優秀助演男優賞にノミネートされた。待機作には、『Trespass Against Us』（マイケル・ファスベンダー共演）、『Alone in Berlin』（エマ・トンプソン共演）、『Assassin's Creed』（ファスベンダー、マリオン・コティヤール共演）がある。

「ハリー・ポッター」シリーズの『ハリー・ポッターと炎のゴブレット』（05）、『ハリー・ポッターと不死鳥の騎士団』（07）、『ハリー・ポッターと死の秘宝 PART1』（10）で演じたアラスター・“マッドアイ”・ムーディ役で、世界中の観客に知られている。

ジム・シェリダン監督の『ザ・フィールド』（90・未）で映画デビューを果たし、続いてマイク・ニューウェル監督の『白馬の伝説』（92）とロン・ハワード監督の『遥かなる大地へ』（92）で小さな役を得たのち、米アカデミー賞最優秀作品賞を受賞したメル・ギブソン監督／製作／主演の『ブレイブハート』（95）の演技で初めて注目された。次に、ニール・ジョーダン監督の『マイケル・コリンズ』（96）や『ブッチャー・ボーイ』（98・未）、そしてジョン・ブアマンが製作総指揮を務めたインディペンデント映画『Angela Mooney』（96）に出演した。

98 年、ブアマン監督による伝記『ジェネラル 天国は血の匂い』（98・未）で、アイルランドの実在のヒーロー、マーティン・カヒル役に抜擢される。その演技で、ロンドン映画批評家協会賞最優秀男優賞など多くの演技賞を獲得した。それ以来、ジョン・ブアマンとは、『テイラー・オブ・パナマ』（01）、『イン・マイ・カントリー』（04・未）、『The Tiger's Tail』（06）でもチームを組んでいる。

マーティン・マクドナー監督の『ヒットマンズ・レクイエム』（08・未）で、ゴールデングローブ賞、英アカデミー（BAFTA）賞、英インディペンデント映画賞にノミネートされた。また、HBO 放送のTV映画「チャーチル 第二次大戦の嵐」（09）ではウィンストン・チャーチルを演じ、エミー賞を受賞し、ゴールデングローブ賞にノミネートされた。

ほかに、ジョン・ウー監督の『M:I-2』（00）、『戦場のジャーナリスト』（00・未）、『Wild About Harry』（00）、スティーブン・スピルバーグ監督の『A.I.』（01）、マーティン・スコセッシ監督の『ギャング・オブ・ニューヨーク』（02）、ダニー・ボイル監督の『28 日後…』（02）、アンソニー・ミンゲラ監督の『コールド マウンテン』（03）、ウォルフガング・ペーターゼン監督の『トロイ』（04）、M・ナイト・シャマラン監督の『ヴィレッジ』（04）、リドリー・スコット監督の『キングダム・オブ・ヘブン』（05）、ニール・ジョーダン監督の『プルートで朝食を』（05）、ロバート・ゼメキス監督の『ベオウルフ／呪われし勇者』（07）、『Perrier's Bounty』（09）、ポール・グリーングラス監督の『グリーン・ゾーン』（10）、『アルバート氏の人生』『The Cup』（共に 11）、『デンジャラス・ラン』『推理作家ポー 最期の5日間』（共に 12）、タグ・ライマン監督の『オール・ユー・ニード・イズ・キル』（14）などがある。また、アニメ『The Pirates! Band of Misfits』（12）、『スマーフ2 アイドル救出大作戦！』（13）では声の出演をしている。

アイルランド生まれ。教師の職に就いたが、演技キャリアを求めてその職を辞し、アイルランドのシアター・カンパニー、パッション・マシンに参加した。舞台作品には、「King of the Castle」「The Plough and the Stars」「Prayers of Sherkin」「桜の園」「ジュノーと孔雀」「On Such As We」などがある。

スタッフ

ロン・ハワード（監督／製作）RON HOWARD (Director/Producer)

米アカデミー賞受賞経験をもつ、今日最も尊敬される監督のひとり。『アポロ１３』（95）や『ビューティフル・マインド』（01）といった高評価のドラマから『スプラッシュ』（84）や『バックマン家の人々』（89）といったヒットコメディまで、過去40 年にわたってハリウッドで最も記憶に残る人気作を何本も監督してきた。

前述の『ビューティフル・マインド』（ラッセル・クロウ主演）で米アカデミー賞最優秀監督賞を受賞。この作品は、同賞最優秀作品賞、最優秀脚色賞、ジェニファー・コネリーの最優秀助演女優賞も受賞した。また、ゴールデングローブ賞では、映画ドラマ部門最優秀作品賞を含む４部門を獲得。自身は全米監督協会（DGA）賞最優秀監督賞も受賞している。この作品での仕事を称えられ、クリエイティブパートナーのブライアン・グレイザーとともに、全米メンタルヘルス・アウェアネス・キャンペーンより、第１回年間アウェアネス賞を授与された。

以前より、監督としての才能を高く評価されてきた。1995 年、前述の『アポロ１３』（トム・ハンクス、ケビン・ベーコン、エド・ハリス、ビル・パクストン、ゲイリー・シニーズ、キャスリーン・クインラン出演）で初めて DGA 賞最優秀監督賞を受賞。実話に基づくこのドラマは、米アカデミー賞９部門にノミネートされ、最優秀編集賞と最優秀音響賞を受賞。全米映画俳優組合（SAG）賞の最優秀アンサンブル演技賞と最優秀助演男優賞にも輝いた。

ピーター・モーガンの高評価を受ける戯曲を映画化した『フロスト×ニクソン』（08）では製作と監督を担当。最優秀作品賞を含む、米アカデミー賞５部門にノミネートされ、全米製作者組合（PGA）より、劇場用映画部門ダリル・F・ザナック“その年のプロデューサー”賞にノミネートされた。これまでに、ドン・アメチーの最優秀助演男優賞と視覚効果賞を獲得した『コクーン』（85）、ヒット作『バックマン家の人々』（89／スティーブ・マーティン主演）や『バックドラフト』（91／ロバート・デ・ニーロ、カート・ラッセル出演）といった多くの監督作品が米アカデミー賞にノミネートされてきた。

05年にミュージアム・オブ・ムービング・イメージより、06年に全米映画編集者協会（ACE）より賞を授与され、10年にはシカゴ映画祭のゴールド・ヒューゴ・キャリア・アチーブメント賞を受賞し、13年にはTVホール・オブ・フェームに殿堂入りした。また、グレイザーとともに、09年のPGA賞マイルストーン賞、同年のニューヨーク大学（NYU）ティッシュ・スクール・オブ・シネマティック・アーツのビッグアップル賞、10年のサイモン・ウィーゼンタール・センターのヒューマニタリアン賞を受賞している。

監督を務めた近作には、高評価を受けたドラマ『ラッシュ／プライドと友情』（13／ピーター・モーガン脚本、クリス・ヘムズワース、ダニエル・ブリュール出演）、音楽ドキュメンタリー『メイド・イン・アメリカ』（13／ジェイ・Z出演）などがある。待機作には、ダン・ブラウンのベストセラー小説に基づく3本目の映画で、トム・ハンクスがロバート・ラングドン役を再び演じる『Inferno』などがある。

それ以前には、ダン・ブラウンの小説を映画化し、ハンクスが主演する『ダ・ヴィンチ・コード』（06）と『天使と悪魔』（09）の監督も務めた。長きにわたって携わってきたさまざまな映画作品には、『ラブINニューヨーク』（82／ヘンリー・ウィンクラー、マイケル・キートン、シェリー・ロング出演）、ロマンチックコメディのメガヒット作『スプラッシュ』（84／トム・ハンクス、ダリル・ハンナ出演）、ファンタジー『ウィロー』（88）、開拓時代を描いた壮大な『遥かなる大地へ』（92／トム・クルーズ、ニコール・キッドマン出演）、サスペンススリラー『身代金』（96／メル・ギブソン、レネ・ルッソ、ゲイリー・シニーズ、デルロイ・リンドー出演）、大ヒットしたホリデイ映画『グリンチ』（00／ジム・キャリー主演）、サスペンス西部劇『ミッシング』（03／ケイト・ブランシェット、トミー・リー・ジョーンズ出演）、『シンデレラマン』（05／ラッセル・クロウ主演）、コメディ『僕が結婚を決めたワケ』（10／ビンス・ボーン、ケビン・ジェイムズ出演）などがある。

また、HBO放送のミニシリーズ「フロム・ジ・アース ［人類、月に立つ］」の12エピソード（98）、「フェリシティの青春」の51エピソード（98～02）、フォックス放送のエミー賞最優秀コメディシリーズ賞受賞作で自身がナレーションも務めた「ブル～スー家は大暴走！」の52エピソード（03～13）、NBC放送の「Parenthood」の９エピソード（10～12）など、多くの賞受賞映画やTV番組で、製作総指揮を務めている。

俳優としてキャリアをスタートさせた。『旅』（59）で演技デビューし『The Music Man』（62）などに出演したのち、TVの長寿シリーズ「メイベリー１１０番」の210エピソード（60～68）に出演してオピー役を演じた。その後、『アメリカン・グラフィティ』（73）や『ラスト・シューティスト』（76）といった映画の演技で高評価を得て、人気シリーズ「ハッピーデイ

ズ」の170エピソード（74～84）にも出演した。
長年の製作パートナーであるブライアン・グレイザーとは、前述のヒットコメディ『ラブINニューヨーク』と『スプラッシュ』で初めてチームを組んだ。86年、ふたりは独立して映画を製作するため、イマジン・エンターテイメントを共同創立した。

チャールズ・レビット（脚本＆ストーリー）CHARLES LEAVITT (Screenplay & Story)

以前にも、脚本を担当し高評価を受けたドラマ『ブラッド・ダイヤモンド』（06／エドワード・ズウィック監督、レオナルド・ディカプリオ、ジェニファー・コネリー、ジャイモン・フンスー出演）で、製作のポーラ・ワインスタインとタッグを組んだ。
ほかの映画作品に、『マイ・フレンド・メモリー』（98／ピーター・チェルソム監督、シャロン・ストーン主演）、『光の旅人　K－PAX』（01／イアン・ソフトリー監督、ケビン・スペイシー主演）、実話に基づくスポーツドラマ『エクスプレス負けざる男たち』（08・未／ゲイリー・フレダー監督、ロブ・ブラウン、デニス・クエイド出演）などがある。待機作は、人気ビデオゲームに基づき脚本を担当した『Warcraft』（ダンカン・ジョーンズ監督）で、2016 年に公開予定である。
最近、マイケル・コリタの小説をサスペンススリラー『Those Who Wish Me Dead』に脚色した。現在は、マット・デイモンとベン・アフレックのパール・ストリート・フィルムズが手がける地球の水危機をテーマにした HBO 作品に取り掛かっている。

リック・ジャッファ（ストーリー）RICK JAFFA (Story)

25 年以上にわたり、妻であり仕事のパートナーでもあるアマンダ・シルバーとチームを組んできた。最近ふたりは、世界的大ヒット作『ジュラシック・ワールド』（15）の脚本を担当。この作品は、世界中で 16 億ドル以上の興行収益をあげて歴代3位となった。
2011 年、ふたりはヒット作『猿の惑星：創世記（ジェネシス）』の脚本と製作を担当。この作品は、画期的な視覚効果によって米アカデミー賞にノミネートされ、「猿の惑星」シリーズを見事に復活させた。14 年、ふたりはその続編『猿の惑星：新世紀（ライジング）』の脚本と製作に携わり、現在は、17 年に公開予定の第3弾『War for the Planet of the Apes』の製作に取り組んでいる。
さらに、現在、ふたりはジェイムズ・キャメロン監督とチームを組み、歴代トップの興行収益を誇る『アバター』（09）の続編として大きな期待が寄せられる『Avatar 2』に取り掛かっている。
テキサス州デ・ソート出身。歴史と政治科学の学位を取って南メソジスト大学を卒業。のちに、南カリフォルニア大学で経営学修士号を取得した。81 年、ウィリアム・モリス・エージェンシーの郵便係としてエンターテイメント業界でのキャリアをスタートさせた。その後、映画部門の部長で有名なエージェント、スタン・ケイメンの秘書となった。のちに、脚本家や監督たちのエージェントとして、『バウンティフルへの旅』（85）や『ロボコップ』（87）といったさまざまな映画作品を抱き合わせで担当するようになった。
シルバーが脚本を書いた『ゆりかごを揺らす手』（92）で製作総指揮を務め、初めてシルバーと仕事をし、そののち、ふたりで『レイジング・ブレット　復讐の銃弾』（96・未）、『レリック』（97）の脚本を担当した。

アマンダ・シルバー（ストーリー）AMANDA SILVER (Story)

成功を収める多くの映画作品で、夫であるリック・ジャッファとチームを組んできた。ふたりは、2015年の世界的大ヒット作『ジュラシック・ワールド』の脚本を担当。この作品は、世界中のボックスオフィスで16億ドル以上をあげて興行収益歴代3位となった。
また、ふたりはヒット作『猿の惑星：創世記（ジェネシス）』（11）の脚本と製作を担当。この作品は、画期的な視覚効果によって米アカデミー賞にノミネートされ、「猿の惑星」シリーズを見事に復活させた。14 年、ふたりはその続編『猿の惑星：新世紀（ライジング）』の脚本と製作に携わり、現在は、17 年に公開予定の第3弾『War for the Planet of the Apes』の製作に取り組んでいる　ニューヨーク市で育ち、イェール大学で歴史の文学士号を取得し、ロサンゼルスに移った。トライスターとパラマウント・ピクチャーズで秘書を務めたのち、南カリフォルニア大学の映画学科に入

り、脚本執筆の美術学修士号を取得した。

卒業論文として書いた脚本が、サスペンススリラー『ゆりかごを揺らす手』(92)である。このヒット作から、製作総指揮を務めていたジャッファとのコラボレーションが始まり、『レイジング・ブレット　復讐の銃弾』(96・未)、『レリック』(97)といった作品でチームを組んだ。また、自身は 93 年に、ケーブルエースのTVシリーズ「堕ちた天使たち」の賞受賞エピソード(アルフォンソ・キュアロン監督編)の脚本も手がけている。

ナサニエル・フィルブリック(原作)NATHANIEL PHILBRICK (Author)

全米図書賞を受賞した「白鯨との闘い」(集英社文庫刊)、ピュリツァー賞のファイナリストとなった「Mayflower」、「Sea of Glory」「The Last Stand」、そしてニューイングランド・ブック賞を受賞した最近の「Bunker Hill」を含め、数多くのベストセラー本を執筆する賞受賞経験をもつ作家である。

2冊の有名な本を通して、捕鯨船エセックス号と「白鯨」についての研究に貢献してきた。一等航海士オーウェン・チェイスと 15 歳の給仕係トーマス・ニカーソンを含めたエセックス号の乗組員たち本人の言葉を集めた「The Loss of the Ship Essex, Sunk By a Whale」(ペンギンクラシックス)の編集に携わった。また、古典「白鯨」の不朽の功績についてのパワフルな個人論を述べた「Why Read Moby-Dick?」(ペンギンブックス)の著者でもある。

最新作「Valiant Ambition」は、2016 年5月 10 日にバイキング社より出版予定である。ナンタケット島に在住。詳細については、www.nathanielphilbrick.com と@natphilbrick を参照されたい。

ジョー・ロス(製作)JOE ROTH (Producer)

現在は、成功を収めるインディペンデント映画のプロデューサーであり、以前は、業界で最も尊敬されるスタジオ・エグゼクティブのひとりであった。

製作を担当した、ティム・バートン監督の『アリス・イン・ワンダーランド』(10／ジョニー・デップ、アン・ハサウェイ、ヘレナ・ボナム＝カーター、ミア・ワシコウスカ出演)は世界中で 10 億ドル以上の興収をあげた。近作は、アンジェリーナ・ジョリーがタイトルロールを演じた、実写ファンタジーのメガヒット作『マレフィセント』(14)。ほかの近作に、『スノーホワイト』(12／クリステン・スチュワート、クリス・ヘムズワース、シャーリーズ・セロン出演)、『オズ　はじまりの戦い』(13／サム・ライミ監督、ジェイムズ・フランコ、ミラ・クニス出演)、『ミリオンダラー・アーム』(14／クレイグ・ギレスピー監督、ジョン・ハム、アラン・アーキン出演)、『天国は、ほんとうにある』(14／ランドール・ウォレス監督、グレッグ・キニア、ケリー・ライリー出演)などがある。

待機作に、『アリス・イン・ワンダーランド』のキャストと再びチームを組む『Alice Through the Looking Glass』、『The Huntsman: Winter's War』(ヘムズワース、セロン、ジェシカ・チャステイン、エミリー・ブラント出演)、『Miracles from Heaven』(ジェニファー・ガーナー、クイーン・ラティファ出演)など。

過去 40 年以上の間に、モーガン・クリークとレボリューション・スタジオを創立し、20 世紀フォックスとウォルト・ディズニー・スタジオの会長も務めた。さらに、300 本以上の映画を製作／監修し、6本の映画では監督も務めている。監修した作品の中には、メガヒット作『ホーム・アローン』(90)や『シックス・センス』(99)、米アカデミー賞ノミネート作品『インサイダー』(99)や『ブラックホーク・ダウン』(01)などがある。また、エミー賞にノミネートされた 2004 年の米アカデミー賞授賞式をプロデュースした。

サッカーチーム、シアトル・サウンダーズの権利の過半数を所有している。全米サッカー史上最も成功を収めるチーム、サウンダーズは 2010 年、「スポーツ・ビジネス・ジャーナル」誌があらゆるスポーツの中から選ぶ“プロフェッショナル・スポーツ・チーム・オブ・ザ・イヤー”に輝いた。

同様に、さまざまな市民活動や慈善活動でも知られている。91 年度バラエティ・クラブの“マン・オブ・ザ・イヤー”賞、96 年度ナショナル・カンファレンス・フォー・コミュニティ＆ジャスティス(NCCJ)のヒューマニタリアン賞、97 年度アメリカン・ミュージアム・オブ・ムービング・イメージ賞、98 年の APLA と全米多発性硬化症協会より授与された賞を含め、さまざまな賞を受賞している。また、米国ユダヤ人協会より 04 年度ドロシー＆シェリル・C・コーウィン・ヒューマン・リレーション賞を授与された。

ポーラ・ワインスタイン（製作）PAULA WEINSTEIN (Producer)

賞受賞経験をもつ映画／TVのプロデューサーであり、素晴らしいキャリアを通してその作品は、興行的にも批評的にも大きな成功を収めてきた。加えて、エンターテイメント業界で最も効果的に資金を集めることのできるプロデューサーのひとりとみなされ、社会活動と成功を収める大衆娯楽を組み合わせるために果たしてきた役割が高く評価されている。

現在、夫であり製作パートナーでもあった故マーク・ローゼンバーグとともに創立した、スプリング・クリーク・プロダクションズの社長を務めている。また、2013 年にトライベッカ・エンタープライズに上級副社長として参加。トライベッカ社のコンテンツ制作、トライベッカ映画祭の企画、国際的なパートナーシップの発展・統括、そしてスタジオ関連の管理をおこなっている。

最近、アニータ・ディアマントのベストセラー小説を映画化したライフタイム放送のミニシリーズ「The Red Tent」（14）、ジェーン・フォンダとリリー・トムリンが出演するネットフリックスのオリジナルコメディシリーズ「グレイス＆フランキー」の1エピソード（15）で、製作総指揮を担当した。

これまでに 30 本以上の映画を製作してきた。その作品には、ロバート・デ・ニーロとビリー・クリスタルが共演したヒットコメディ『アナライズ・ミー』（99）とその続編『アナライズ・ユー』（02）、実話に基づくドラマ『パーフェクト ストーム』（00／ジョージ・クルーニー、マーク・ウォールバーグ出演）、コメディ『ウエディング宣言』（05・未／ジェーン・フォンダ主演）、米アカデミー賞5部門にノミネートされた『ブラッド・ダイヤモンド』（06／レオナルド・ディカプリオ主演）、政治色の濃いドラマ『カンパニー・メン』（10／トミー・リー・ジョーンズ、ベン・アフレック出演）、ジェイソン・ベイトマンとティナ・フェイがアンサンブルキャストを率いる『あなたを見送る7日間』（14・未）などがある。

また、記憶に残る政界の実話に基づいた HBO 放送の野心作数本で、クリエイターと製作総指揮を務めた。1本目は、ジェイムズ・ウッズがジョー・マッカーシー上院議員の物議を醸す弁護士を演じた「虚偽／シチズン・コーン」（92）で、自身がエミー賞とゴールデングローブ賞の最優秀TV映画部門にノミネートされた。次に、エミー賞とゴールデングローブ賞を受賞した伝記作品「プレジデント・トルーマン」（95・未／ゲイリー・シニーズ主演）、そして婦人参政権運動を描いた「アイアン・エンジェルズ／自由への闘い」（04／ヒラリー・スワンク、アンジェリカ・ヒューストン出演）に携わった。また、論議を呼んだ 2000 年の大統領選挙の周辺で起こった出来事を描いて高評価を受けたドラマ「リカウント」（08）は、ジェイ・ローチ監督の最優秀監督賞を含むエミー賞3部門を受賞。同作は、ケビン・スペイシー、トム・ウィルキンソン、ローラ・ダーンが出演し、キャサリン・ハリスを演じたダーンがゴールデングローブ賞を受賞。さらに、08 年の金融危機を描いてエミー賞とゴールデングローブ賞にノミネートされた「Too Big to Fail」（11）には、ウィリアム・ハート、ジェイムズ・ウッズ、ポール・ジアマッティが出演し、ベン・バーナンキを演じたジアマッティが全米映画俳優組合（SAG）賞を受賞した。

コロンビア大学で学び、ニューヨーク市で映画編集者としてスタートし、そののち、ジョン・リンゼイ市長のオフィスで特別イベントディレクターとして従事した。その後、インターナショナル・クリエイティブ・マネジメント（ICM）のエージェントとなり、次にウィリアム・モリス・エージェンシーに入り、ジェーン・フォンダ、ドナルド・サザーランド、リリー・トムリン、テレンス・マリックといったクライアントの作品を扱った。その後、ワーナー・ブラザースに製作部副部長として入社し、さらにその後、20世紀フォックスの世界劇場映画製作部上級副部長に昇進。米アカデミー賞に複数ノミネートされた『ジュリア』（77）と『9時から5時まで』（80）で企画・製作を務めるジェーン・フォンダを助けた。

次に、ザ・ラッド・カンパニーに参加し、ローレンス・カスダンの監督デビュー作『白いドレスの女』（81）といった作品の監修に携わったのち、ユナイテッド・アーティスツの映画部門部長に任命された。この地位に就いた最初の女性として、すぐに女性監督にもっと多くのチャンスを与えようと試みた。当時のヒット作には、バーブラ・ストライサンドが監督と主演を務めた米アカデミー賞とゴールデングローブ賞受賞作『愛のイエントル』（83）、『ウォー・ゲーム』（83）などがある。

女性監督ユーザン・パルシーがメガホンをとり、南アフリカの現状を描いたポリティカルスリラー『白く渇いた季節』（89）で、インディペンデント製作のキャリアをスタートさせた。この作品でマーロン・ブランドが米アカデミー賞にノミネートされた。夫ローゼンバーグとともに製作した『恋のゆくえ／ファビュラス・ベイカー・ボーイズ』（89）は米アカデミー賞4部門にノミネートされた。この作品で、ミシェル・ファイファーは米アカデミー／ゴールデングローブ／英アカ

デミー（BAFTA）賞にノミネートされて一躍脚光を浴びた。また、米アカデミー賞にノミネートされた『フィアレス』（93／ピーター・ウィアー監督）、グウィネス・パルトローが映画デビューを果たした『フレッシュ・アンド・ボーン／渇いた愛のゆくえ』（93・未）でも製作を担当した。

86 年、ハリウッド女性政治委員会（HWPC）を共同創立し、そののち 10 年間この組織を率いて、さまざまな民主党候補者のために数千万ドルの資金を集めた。ネルソン・マンデラが初めてアメリカのロサンゼルスを訪れた際には、ハリウッドの公式代表者に選ばれ、マンデラの活動を支援するため、数百万ドルの資金を集め、オバマ大統領の国家財政委員会でも委員を務めた。さらに、全米黒人地位向上協会の弁護基金の委員も務め、アメリカ自由人権協会（ACLU）の役員でもある。92 年、ロサンゼルス・サウスセントラル地区にマーク・ローゼンバーグ・リーガルセンターを創立。これまでに、ウイメン・イン・フィルムより権威あるクリスタル賞、「バラエティ」誌よりホール・オブ・フェーム賞、全米都市同盟市民賞、ACLU 南カリフォルニア支部より権利章典賞を授与されている。

ウィル・ウォード（製作）WILL WARD (Producer)

映画／音楽／ブランド／製作／タレント／企業戦略を専門とする、ビバリーヒルズに拠点を置くタレント＆ブランド・マネジメント会社ROARの共同創立パートナーである。タレント部門の部長として、クリス・ヘムズワース、リアム・ヘムズワース、コビー・スマルダーズ、ルーク・ブレイシー、渡辺謙といったスターたちがキャリアをスタートさせるための補佐・管理に携わっている。

また、3度グラミー賞に輝くアメリカのトップアーティスト“ザック・ブラウン・バンド”のマネジメントもおこない、彼らのツアーやそのほかの活動を監督している。マルチプラチナを売り上げるこのバンドはラジオチャートで 14 曲のナンバーワンシングルを出し、10 日間のスタジアムツアーを含めた大規模なツアーで 2015 年を締めくくる。また、自身はザック・ブラウンのサザン・グラウンド・ミュージック＆フード・フェスティバルを支える影の立役者でもある。

現在、世界を舞台にしたアクション映画でシリーズ化を狙うソニー作品や、そのほかのプロジェクトの企画開発に取り掛かっている。

さらに、ROAR の企業部門でも仕事をし、ニューヨーク市のメキシコ料理店オットーズ・タコスの構築と資金調達の陣頭指揮を執った。オットーズは最近、ニューヨークに3店舗目をオープンした。

クリエイティブ・アーティスト・エージェンシーのナッシュビル・オフィスでキャリアをスタートさせた。そこで3年間仕事をしたのち、現在ウィリアム・モリス・エンデバーとして知られるエンデバー社に入社し、映画部門のエージェントを務めていた。

サウスカロライナ州チャールストン大学でビジネスと日本語を学んだ。

ブライアン・グレイザー（製作）BRIAN GRAZER (Producer)

40年近く映画／TVの製作に携わり、米アカデミー賞／エミー賞受賞経験をもつプロデューサーである。ロン・ハワード監督とのパートナーシップは、過去40年間において最も記憶に残り高評価を受けた映画作品の数々を生み出してきた。2015年4月、最初の著作本「A Curious Mind: The Secret to a Bigger Life」を出版。5週間にわたって「ニューヨーク・タイムズ」紙のベストセラー・リストに載った。

キャリアの初期には、84年のヒットコメディ『スプラッシュ』の製作とストーリーを担当し、米アカデミー賞最優秀脚本賞にほかの脚本家3人とともにノミネートされた。そののち、『アポロ13』（95）のプロデューサーとして米アカデミー賞最優秀作品賞にノミネートされ、全米製作者組合（PGA）賞のダリル・F・ザナック“その年の映画プロデューサー”賞を受賞。02年、『ビューティフル・マインド』（01）で米アカデミー賞最優秀作品賞を受賞。この作品はそのほか3部門も受賞し、ゴールデングローブ賞映画ドラマ部門最優秀作品賞を含む4部門も受賞した。また、この作品で全米メンタルヘルス・アウェアネス・キャンペーンの第1回年間アウェアネス賞を受賞した。さらに、『フロスト×ニクソン』（08）でもPGA賞にノミネートされた。

これまでに担当した映画／TV作品は、全部で43の米アカデミー賞ノミネート／158のエミー賞ノミネートを獲得している。同時に、携わった劇場映画／音楽／ビデオは140億ドル以上の世界興行収益を上げている。この商業的／芸術的業績を称えられ、PGAより01年にデイビッド・O・セルズニック生涯功労賞、09年にマイルストーン賞を授与さ

れた。
業績と慈善活動により、ハリウッド・ウォーク・オブ・フェームに星を刻み、全米映画館主協会の生涯功労賞／ニューヨーク大学（NYU）ティッシュ・スクール・オブ・シネマティック・アーツのビッグアップル賞／映画音響編集フィルムメイカー賞を受賞。さらに、サイモン・ウィーゼンタール・センターのヒューマニタリアン賞／人道的慈善活動に対してのアルフレッド・マン財団ビジョン賞／アルツハイマー病協会のエイブ・バローズ・エンターテイメント賞／プロマックスBDAの生涯功労賞も受賞している。07年、「タイム」誌の“最も影響力をもつ世界の100人”のひとりに選ばれた。
待機作には、ダグ・リーマン監督の『American Made』（トム・クルーズ主演）、ダン・ブラウンの小説を映画化するハワード監督の『Inferno』（トム・ハンクス主演）などがある。また、現在、ジョン・リドリーが脚本と監督を担当する『L.A. Riots』の準備段階に入っている。
これまでに、『バックマン家の人々』（89）、『バックドラフト』（91）、『身代金』（96）、『グリンチ』（00）、『シンデレラマン』（05／ラッセル・クロウ主演）、ダン・ブラウンの小説を基にしたトム・ハンクス主演作『ダ・ヴィンチ・コード』（06）と『天使と悪魔』（09）、『ラッシュ／プライドと友情』（13／ピーター・モーガン脚本、クリス・ヘムズワース、ダニエル・ブリュール出演）、音楽ドキュメンタリー『メイド・イン・アメリカ』（13）といったロン・ハワード監督作品を含め、数多くの映画を担当してきた。
また、ハワード監督以外の監督たちとも、『スパイ・ライク・アス』（85）、『偽りのヘブン』（88・未）、『キンダガートン・コップ』（90）、『マイ・ガール』（91）、『ナッティ・プロフェッサー／クランプ教授の場合』（96）、『ライアー ライアー』（97）、『ブルークラッシュ』『8 Mile』（共に02）、『ディボース・ショウ』（03）、『プライド 栄光への絆』（04）、サンダンス映画祭でプレミア上映されたドキュメンタリー『インサイド・ディープ・スロート』（04）、『フライトプラン』（05／ジョディ・フォスター主演）、『インサイド・マン』（06／スパイク・リー監督、デンゼル・ワシントン、クライブ・オーウェン、フォスター出演）、リドリー・スコット監督の『アメリカン・ギャングスター』（07／ラッセル・クロウ、ワシントン出演）と『ロビン・フッド』（10／クロウ、ケイト・ブランシェット出演）、クリント・イーストウッド監督の『チェンジリング』（08／アンジェリーナ・ジョリー主演）と『J・エドガー』（11／レオナルド・ディカプリオ主演）、『ペントハウス』（11／ベン・スティラー、エディ・マーフィ出演）、『ジェームス・ブラウン ～最高の魂（ソウル）を持つ男～』（14）など、幅広い作品でチームを組んでいる。
98年にはHBO放送のミニシリーズ「フロム・ジ・アース ［人類、月に立つ］」（98）、04年には「ブル～スー家は大暴走！」（03～06,13）、06年にはドラマシリーズ「24 TWENTY FOUR」（01～10）のプロデューサーとして、エミー賞を3回受賞している。ほかのTV製作作品には、ABC放送の「Sports Night」の45エピソード（98～00）、ワーナー・ブラザースTVの「フェリシティの青春」の84エピソード（98～02）、CBS放送の「SHARK ～カリスマ敏腕検察官」の38エピソード（06～08）、NBC放送のピーボディ賞受賞シリーズ「Friday Night Lights」の66エピソード（06～11）と「Parenthood」の9エピソード（10～12）、FOX放送の「ギャング・イン・LA」の4エピソード（14）と「Empire 成功の代償」の2エピソード（15）、ナショナル・ジオグラフィック・チャンネルの「Breakthrough」の1エピソード（15）などがある。12年、ビリー・クリスタルが司会を務めた第84回米アカデミー賞授賞式の製作を担当した。
TVプロジェクトの企画担当プロデューサーとしてキャリアをスタートさせた。80年代初頭にパラマウントのTVパイロット番組の製作総指揮をしていたときに初めてロン・ハワードと出会った。そののち、ヒットコメディ『ラブINニューヨーク』（82）と前述の『スプラッシュ』で初めてチームを組み、86年に、現在も会長としてともに運営を続けているイマジン・エンターテイメントを共同創立した。

ブルース・バーマン（製作総指揮）BRUCE BERMAN (Executive Producer)
ビレッジ・ロードショー・ピクチャーズの会長兼 CEO である。ビレッジ社はワーナー・ブラザース映画とソニー・ピクチャーズとの共同提携を成功させ、オーストラリア／ニュージーランド／シンガポール国内の提携先によって世界中の選定区域に配給される作品や、それ以外の地域でワーナー・ブラザースとソニー・ピクチャーズによって配給される作品全般を共同製作している。
ビレッジ社の旗印のもと、『LEGO（R）ムービー』（14／フィル・ロード＆クリストファー・ミラー監督）、クリント・イーストウッド監督の『アメリカン・スナイパー』（14／ブラッドリー・クーパー出演）ジョージ・ミラー監督の『マッド・マックス

怒りのデス・ロード』(15／トム・ハーディ、シャーリーズ・セロン出演)、『カリフォルニア・ダウン』(15／ドウェイン・ジョンソン主演)といった最近のヒット作の製作総指揮に携わった。

待機作には、『The Legend of Tarzan』(アレキサンダー・スカルスガルド、マーゴット・ロビー、サミュエル・L・ジャクソン出演)、『Knights of the Roundtable: King Arthur』(ガイ・リッチー監督、チャーリー・ハナム、ジュード・ロウ出演)などがある。

ほかにも、デンゼル・ワシントンが米アカデミー賞を受賞した『トレーニング デイ』(01)、ジョージ・クルーニーとブラッド・ピット率いるオールスターキャストが出演する「オーシャンズ」3部作(01,04,07)、ショーン・ペンとティム・ロビンスの米アカデミー賞受賞演技が光る『ミスティック・リバー』(03／イーストウッド監督)、『マトリックス リローデッド』と『マトリックス レボリューションズ』(共に03)、高い評価を受けるドラマ『グラン・トリノ』(08／イーストウッド監督・主演)、ガイ・リッチーが監督し、ロバート・ダウニー・Jr. とジュード・ロウが主演して大ヒットしたアクションアドベンチャー『シャーロック・ホームズ』(09)とその続編『シャーロック・ホームズ シャドウ ゲーム』(11)、バズ・ラーマン監督の『華麗なるギャツビー』(13／レオナルド・ディカプリオ主演)といった作品で製作総指揮を務めている。

ワーナー・ブラザースとの提携のもとで製作された初期の作品には、『プラクティカル・マジック』(98／サンドラ・ブロック、ニコール・キッドマン出演)、『アナライズ・ミー』(99／ロバート・デ・デニーロ、ビリー・クリスタル出演)、『マトリックス』(99／キアヌ・リーブス、ローレンス・フィッシュバーン出演)、『スリー・キングス』(99／ジョージ・クルーニー主演)、『スペース カウボーイ』(00／クリント・イーストウッド監督・主演)、『デンジャラス・ビューティー』(00／ブロック、ベンジャミン・ブラット出演)といったヒット作がある。

首都ワシントンのジョージタウン大学ロー・スクールに在籍中に米国映画協会でジャック・バレンティと仕事をし、映画ビジネスでのキャリアをスタートさせた。法律の学位を取得したのち、78 年にカサブランカ・フィルムズで仕事に就き、そののちユニバーサルに移籍し、82 年に製作部副部長に昇進した。

84 年、ワーナー・ブラザースに製作部副部長として入り、4年後には製作部門の上級部長に昇進した。89 年9月に劇場映画製作部門の責任者に任命され、91 年には国際劇場映画製作部門の責任者となり、96 年5月まで同役職に就いていた。その監修のもと、ワーナー・ブラザース映画は、米アカデミー賞最優秀作品賞を受賞した『ドライビング Miss デイジー』(89)、『グッドフェローズ』『推定無罪』(共に 90)、『JFK』『ロビン・フッド』(共に 91)、『ボディガード』『マルコムX』『沈黙の戦艦』(いずれも 92)、『ペリカン文書』『デーヴ』『ハリソン・フォード 逃亡者』(いずれも 93)、『依頼人』『ディスクロージャー』(共に 94)、『アウトブレイク』『バットマン フォーエヴァー』(共に 95)、『ツイスター』『評決のとき』(共に 96)などの製作／配給に携わった。

96 年5月、ワーナー・ブラザース映画にインディペンデント映画会社プランBエンターテイメントを立ち上げた。98 年2月に、ビレッジ・ロードショー・ピクチャーズの会長兼 CEO に任命された。

サラ・ブラッドショウ(製作総指揮)SARAH BRADSHAW (Executive Producer)

英国を代表するプロデューサーのひとり。これまでに、当代で最も多作で才能豊かなフィルムメイカーや俳優たちと仕事をしてきた。製作総指揮を担当した近作は、「眠れる森の美女」を新しく、よりダークなファンタジードラマへと作り変えたヒット作『マレフィセント』(14／アンジェリーナ・ジョリー主演)である。この作品は、オープニング週末にボックスオフィスのトップに躍り出て、劇場公開中に7億5000万ドル以上の興収をあげた。何度も組んできた製作のジョー・ロスとチームを組んだ作品である。

製作総指揮を担当する待機作は、同じくロスが製作に携わる『The Huntsman: Winter's War』(セドリック・ニコラス＝トロイヤン監督、クリス・ヘムズワース、シャーリーズ・セロン、ジェシカ・チャステイン、エミリー・ブラント出演)。現在は、2017年に公開予定の、ユニバーサルのモンスター映画を再稼働させる『The Mummy』(アレックス・カーツマン監督)の準備段階に入っている。

同じくロスとチームを組み共同製作を担当した『スノーホワイト』(12／ヘムズワース、セロン、クリステン・スチュワート出演)では、ユニットプロダクションマネジャー(UPM)も務めた。愛されるおとぎ話に暗い捻りを加えたこの作品は、世界中で4億ドル以上の興収をあげ、米アカデミー賞最優秀衣装デザイン賞と最優秀視覚効果賞にノミネートされたほか、さまざまな栄誉に輝いた。

UPMとして、歴史劇『アレキサンダー』(04／オリバー・ストーン監督、コリン・ファレル主演)、ジェリー・ブラッカイマーが製作した2作品『プリンス・オブ・ペルシャ／時間の砂』(10／マイク・ニューウェル監督、ジェイク・ギレンホール主演)と10億ドル以上の興収をあげて大成功を収めた「パイレーツ・オブ・カリビアン」シリーズ第4弾『パイレーツ・オブ・カリビアン／生命(いのち)の泉』(11／ロブ・マーシャル監督、ジョニー・デップ主演)を担当。製作補とUPMを担当した作品には、ジョージ・クルーニーが米アカデミー賞最優秀助演男優賞を受賞し、最優秀脚本賞にもノミネートされて高評価を受けたポリティカルサスペンス『シリアナ』(05／スティーブン・ギャガン監督)、80年代のTVドラマに基づくサスペンスアクション『マイアミ・バイス』(06／マイケル・マン監督、コリン・ファレル、ジェイミー・フォックス出演)などがある。

スティーブン・フリアーズ監督の『ジキル＆ハイド』(96)で視覚効果プロデューサーを担当し、映画のキャリアをスタートさせた。キャリア初期には、リュック・ベッソン監督の『フィフス・エレメント』(97／ブルース・ウィリス、ゲイリー・オールドマン出演)でプロダクションマネジャー、ジョン・アミエル監督の『エントラップメント』(99／ショーン・コネリー、キャサリン・ゼタ＝ジョーンズ出演)とトニー・スコット監督の『スパイ・ゲーム』(01／ロバート・レッドフォード、ブラッド・ピット出演)でプロダクションスーパーバイザーを務めた。また、ローランド・エメリッヒ監督の『紀元前1万年』(08)でも製作総指揮に携わっている。

パラク・パテル(製作総指揮)PALAK PATEL (Executive Producer)

現在、ソニー・ピクチャーズ・エンターテイメントの製作・開発部上級副部長を務めている。

最近まで、ロス・フィルムズの製作・開発部部長の職に就き、開発と製作に入るあらゆる映画プロジェクトの監修・統括をおこなっていた。在籍期間中に、『スノーホワイト』(12)、『オズ　はじまりの戦い』(13)、『マレフィセント』『ミリオンダラー・アーム』『サボタージュ』(いずれも 14)、待機作『The Huntsman: Winter's War』の製作総指揮を担当。

以前には、ポーラ・ワインスタインのスプリング・クリーク・プロダクションズで製作部の幹部を務めていた。その期間に、『ルーニー・テューンズ：バック・イン・アクション』(03)、『隣のリッチマン』(04・未)、『ウエディング宣言』(05・未)、『迷い婚　ーすべての迷える女性たちへー』(05)、『ブラッド・ダイヤモンド』(06)、TV映画「リカウント」(08)といった作品の監修を手助けした。

スプリング・クリークに参加する以前には、フォーカス・フィーチャーズで西海岸のストーリーエディターを務め、ラッセル・シュワルツ、スコット・グリーンスタイン、ドナ・ジグリオッティたちと緊密に仕事をしていた。フォーカス社では、『トラフィック』『ベティ・サイズモア』(共に 00)、『ゴスフォード・パーク』『バーバー』(共に 01)、『抱擁』『くたばれ！ハリウッド』(共に 02)、『ソウル・トレード』(03・未)といった作品にかかわった。また、『花様年華』(00)、『モンスーン・ウェディング』『Wet Hot American Summer』(共に 01)では、権利取得部門を補佐した。

故郷フィラデルフィアで、『シックス・センス』(99)のインターン／アシスタントとして仕事を始めた。ロサンゼルスに移ったのち、ポール・シフ・プロダクションズの開発アシスタントとして仕事をした。

エリカ・ハギンズ(製作総指揮)ERICA HUGGINS (Executive Producer)

ロン・ハワードとブライアン・グレイザーの製作会社イマジン・エンターテイメントの社長である。

2004 年にイマジン社に入社して以来、『永遠の僕たち』(11／ガス・バン・サント監督、ミア・ワシコウスカ主演)、『J・エドガー』(11／クリント・イーストウッド監督、レオナルド・ディカプリオ主演)、『Katy Perry: Part of Me 3-D』(12)、『メイド・イン・アメリカ』(13／ロン・ハワード監督)、F1の世界を描いたカーレースドラマ『ラッシュ／プライドと友情』(13／ハワード監督、クリス・ヘムズワース、ダニエル・ブリュール出演)、伝記映画『ジェームス・ブラウン　～最高の魂(ソウル)を持つ男～』(14／テイト・テイラー監督、チャドウィック・ボーズマン主演)など、多種多様な作品の製作／監修をおこなってきた。TVでは、NBC 放送の賞受賞TVシリーズ「Parenthood」(10～15)でクリエイターのジェイソン・ケイティムズとチームを組んで仕事をした。

イマジン社に参入する以前には、インタースコープとレーダー・ピクチャーズで上級副社長を務めていた。インタースコープ社では、『BOYS』(96／ウィノナ・ライダー主演)、高評価を受けた『グリッドロック』(96／トゥパック・シャクール、ティム・ロス出演)で製作に携わり、米アカデミー賞最優秀視覚効果賞を獲得した『奇蹟の輝き』(98／ロビン・

ウィリアムズ、キューバ・グッディング・Jr出演）では製作総指揮を担当した。レーダー社では、『ル・ディヴォース／パリに恋して』（03／ケイト・ハドソン、ナオミ・ワッツ出演）、『ラブ・スクール』（03・未／マンディ・ムーア主演）といった作品に携わった。

プロデューサーになる以前は、映画の編集者として仕事をしていた。その作品には、マイケル・チミノ監督の2作品『シシリアン』（87）と『逃亡者』（90）、ジョン・ウォーターズ監督の3作品『ヘアスプレー』（88）、『クライ・ベイビー』（90）、『シリアル・ママ』（94）などがある。

デイビッド・バーグスタイン（製作総指揮）DAVID BERGSTEIN (Executive Producer)

12 年以上にわたり、幅広い映画作品の製作／製作総指揮に携わってきた資本家／投資銀行家／企業家である。

2004 年に、デイビッド・マメットが脚本と監督を担当した犯罪ドラマ『特捜刑事 スパルタン』（未）でプロデューサーとしてデビューした。同年、ピーター・ハウイット監督のロマンチックコメディ『Laws of Attraction』（ジュリアン・ムーア、ピアース・ブロスナン出演）の製作も担当し、ハワード・ドゥイッチ監督のコメディ『隣のヒットマンズ 全弾発射』（ブルース・ウィリス、マシュー・ペリー出演）では製作総指揮を務めた。

そのほか初期の作品には、『The Wendell Baker Story』（05／オーウェン＆ルーク・ウィルソン主演）、『カオス』（05／ジェイソン・ステイサム、ライアン・フィリップ、ウェズリー・スナイプス出演）、『ポイント45』（06／ゲイリー・レノン監督、ミラ・ジョボビッチ主演）、『ボーダータウン 報道されない殺人者』（06／グレゴリー・ナバ監督、ジェニファー・ロペス、マーティン・シーン出演）などがある。

それ以来、『その土曜日、7時58分』（07／シドニー・ルメット監督、フィリップ・シーモア・ホフマン、イーサン・ホーク、アルバート・フィニー、マリサ・トメイ出演）、『パニック・エレベーター』（07・未／アンバー・タンブリン、アーミー・ハマー出演）、『$5 a Day』（08／ナイジェル・コール監督、クリストファー・ウォーケン、シャロン・ストーン、ディーン・ケイン出演）、『シェルター』（09／ジュリアン・ムーア主演）、『ラブ・ランチ 欲望のナイトクラブ』（10・未／テイラー・ハックフォード監督、ヘレン・ミレン主演）、『Father of Invention』（10／ケビン・スペイシー主演）といった作品の製作／製作総指揮に携わってきた。

アンソニー・ドッド・マントル（撮影）ANTHONY DOD MANTLE (Director of Photography)

ダニー・ボイル監督の米アカデミー賞最優秀作品賞受賞作『スラムドッグ ＳミリオネＡ』（08）の撮影で、米アカデミー賞、英アカデミー（BAFTA）賞、そのほか多くの批評家協会賞を受賞した。ボイル監督とは、TV映画「ストランペット」（01）、『28日後…』（02）、『127時間』（10）、『トランス』（13）、『ミリオンズ』（04）でもチームを組んでいる。

ロン・ハワード監督とは、以前にもカーレースドラマ『ラッシュ／プライドと友情』（13／クリス・ヘムズワース主演）でタッグを組んだ。そのほか、トマス・ビンターベア監督とは『The Biggest Heroes』（96）、『セレブレーション』（98）、『アンビリーバブル』（03・未）、『DEAR WENDY ディア・ウェンディ』（05）、『When a Man Comes Home』（07）で、ラース・フォン・トリアー監督とは『ドッグヴィル』（03）、『マンダレイ』（05）、『アンチクライスト』（09）で、ケビン・マクドナルド監督とは自身が英インディペンデント映画賞最優秀技術賞を受賞した『ラストキング・オブ・スコットランド』（06）、『第九軍団のワシ』（10）といった作品で繰り返し仕事をしている。

ほかの作品に、『ミフネ』（98）、『ジュリアン』（99）、『Krig』（03）、『ブラザーズ・オブ・ザ・ヘッド』（05）、『Mit Danmark』（06）、『Just Like Home』（07）、『Country Wedding』（08）、『ジャッジ・ドレッド』（12）などがある。

TVでは、ケネス・ブラナー主演シリーズ「刑事ヴァランダー」の2エピソード（08）の撮影で BAFTA TV賞を受賞した。

マーク・ティルデスリー（美術）MARK TILDESLEY (Production Designer)

舞台／映画／TVで仕事をする英国人デザイナー／演出家である。

映画作品で、ダニー・ボイル、マーク・エバンス、マイケル・ウィンターボトムといった監督たちと何度もチームを組んできた。ボイル監督の『28日後…』（02）、自身が英インディペンデント映画賞を受賞した『サンシャイン2057』（07）、『トランス』（13）、『ミリオンズ』（04）で美術を担当。エバンス監督の『House of America』（97）、『極悪人

RESURRECTION MAN』(00・未)の美術を担当し、前者で英アカデミー(BAFTA)ウェールズ・アワードを受賞。ウィンターボトム監督との映画作品には、『アイ ウォント ユー』(98)、『いつまでも二人で』『ひかりのまち』(共に 99)、『めぐり逢う大地』(00)、自身が英インディペンデント映画賞にノミネートされた2作品『24アワー・パーティ・ピープル』(02)と『CODE46』(03)、そして『キラー・インサイド・ミー』(10)などがある。

そのほかの担当映画に、『パッション』(03・未/ロジャー・ミッシェル監督)、自身が美術監督組合賞にノミネートされた『ナイロビの蜂』(05/フェルナンド・メイレレス監督)、『ハッピー・ゴー・ラッキー』(07・未)、『パイレーツ・ロック』(09/リチャード・カーティス監督)、『ロード・オブ・クエスト ~ドラゴンとユニコーンの剣~』(11・未/デイビッド・ゴードン・グリーン監督)、『ワン・デイ 23年のラブストーリー』(11/ロネ・シェルフィグ監督)、『フィフス・エステート/世界から狙われた男』(13・未/ビル・コンドン監督)などがある。待機作は、2016 年に公開予定の『Snowden』(オリバー・ストーン監督)。

12 年度ロンドンオリンピックの開会式の美術デザインでエミー賞を受賞した。

旧ロンドン・カレッジ・オブ・プリンティング(現在のロンドン芸術大学)を卒業し、ウィンブルドン・スクール・オブ・アートで優等学士学位を取得。キャッチ 22 シアター・カンパニーを共同創立し、舞台デザインも続けている。ナショナル・シアターで上演された、「フランケンシュタイン」の舞台美術を担当し、再び演出家ダニー・ボイルとチームを組んだ。この作品で、批評家サークル演劇賞を受賞し、イブニング・スタンダード賞にもノミネートされた。

マイク・ヒル(編集)MIKE HILL (Editor)

ダン・ハンリーとチームを組み、ロン・ハワード監督作品の編集を手がけ、業界で最も長く、最も成功を収める関係を享受してきた。ハワード監督の事実に基づくドラマ『アポロ13』(95)で米アカデミー賞最優秀編集賞を受賞。そののちも、ハワード監督の同賞最優秀作品賞を受賞した『ビューティフル・マインド』(01)、『シンデレラマン』(05)、『フロスト×ニクソン』(08)で同編集賞にノミネートされた。最近、カーレースアクションドラマ『ラッシュ/プライドと友情』(13)で英アカデミー(BAFTA)賞最優秀編集賞を受賞。

ハワード監督とハンリーとは、監督の過去 40 年以上にわたる映画作品すべてでチームを組んできた。その作品には、『ラブINニューヨーク』(82)、『スプラッシュ』(84)、『コクーン』(85)、『ウィロー』(88)、『バックマン家の人々』(89)、『バックドラフト』(91)、『遥かなる大地へ』(92)、『身代金』(96)、『グリンチ』(00)、『ミッシング』(03)、『ダ・ヴィンチ・コード』(06)と『天使と悪魔』(09)などがある。

ほかの担当作品に、『私立ガードマン/全員無責任』(86)、『ペット・セメタリー』(89)、『プロブレム・チャイルド/うわさの問題児』(90)など。

ダン・ハンリー(編集)DAN HANLEY (Editor)

1982 年より、編集パートナーを組むマイク・ヒルとともに、ロン・ハワード監督作品すべての編集を手がけてきた。これは、今日の映画界で最も長く、最も多作のコラボレーションとして知られている。

ハワード監督の事実に基づくドラマ『アポロ13』(95)で米アカデミー賞最優秀編集賞を受賞。そののちも、ハワード監督の同賞最優秀作品賞を受賞した『ビューティフル・マインド』(01)、『シンデレラマン』(05)、『フロスト×ニクソン』(08)で同編集賞にノミネートされた。最近、カーレースアクションドラマ『ラッシュ/プライドと友情』(13)で英アカデミー(BAFTA)賞最優秀編集賞を受賞。

ヒルとともに、『ラブINニューヨーク』(82)、『スプラッシュ』(84)、『コクーン』(85)、『ウィロー』(88)、『バックマン家の人々』(89)、『バックドラフト』(91)、『遥かなる大地へ』(92)、『身代金』(96)、『グリンチ』(00)、『ミッシング』(03)、『ダ・ヴィンチ・コード』(06)と『天使と悪魔』(09)など、ハワード監督作品の編集を担当。

ほかの担当作品に、『私立ガードマン/全員無責任』(86)、『ノーマンズ・ランド』(87)、『ペット・セメタリー』(89)、『プロブレム・チャイルド/うわさの問題児』(90)、『イン&アウト』などがある。

ジュリアン・デイ(衣装)JULIAN DAY (Costume Designer)

近作は、ロン・ハワード監督の実話に基づくドラマ『ラッシュ/プライドと友情』(13/クリス・ヘムズワース主演)。

待機作は、同じくハワード監督とチームを組んだ、ダン・ブラウンのベストセラー小説に基づくドラマ『Inferno』(トム・ハンクス主演)、バー・スティアーズ監督の『Pride and Prejudice and Zombies』、スザンナ・ホワイト監督の『Our Kind of Traitor』など。

これまでに、『Last Resort』(00)、『マイ・サマー・オブ・ラブ』(04・未)、『コントロール』(07)、『Kicks』『Tormented』『アリス・クリードの失踪』『ノーウェアボーイ　ひとりぼっちのあいつ』(いずれも 09)、『ブライトン・ロック』(10・未)、『イリュージョン』(11・未)、『砂漠でサーモン・フィッシング』『Isle of Dogs』(共に 11)、『バーバリアン怪奇映画特殊音響効果製作所』(12・未)、『ダイアナ』『Alan Partridge: Alpha Papa』『Don Hemingway』(いずれも 13)といった幅広いインディペンデント映画の衣装を担当してきた。

演劇研究の学位を取得し、バーミンガム大学を卒業。ロンドンにあるレンタル衣装のエンジェルスで1年間仕事をしている間に衣装に興味を抱くようになった。

ロケ・バニョス(音楽)ROQUE BAÑOS (Composer)

国際的に認められる作曲家であり、映画音楽の作曲で多くの栄誉に輝いてきた。2013 年のカルトホラー『死霊のはらわた』(フェデ・アルバレス監督)の音楽で国際映画音楽批評家賞ファンタジー／SF／ホラー映画部門最優秀オリジナル楽曲賞と最優秀作曲賞を受賞。最近、『ザ・トランスポーター』(14・未)の音楽でガウディ賞を受賞し、ゴヤ賞／スペイン・シネマ・ライターズ・サークル(CEC)賞にもノミネートされた。

それ以前には、『ゴヤ』(99・未)で CEC 賞、『Common Wealth』(00)でスペイン音楽賞、『サロメ』(02)でゴヤ賞、『The 7th Day』(04)で CEC 賞ノミネート、『Las 13 Rosas』(07)でゴヤ賞と CEC 賞ノミネート、『オックスフォード連続殺人』(08・未)でゴヤ賞とスペイン音楽賞、『プリズン211』(09・未)で CEC 賞とスペイン音楽賞を獲得している。そのほかにも、前述の『Common Wealth』、『マカロニ・ウエスタン　800発の銃弾』(02)、『マシニスト』(04)、『機械じかけの小児病棟』(05)、『アラトリステ』(06)、『気狂いピエロの決闘』(10・未)でゴヤ賞にノミネートされたほか、キャリアを通して数多くの賞にノミネートされてきた。

近作は、ホラー『Regression』(15／アレハンドロ・アメナーバル監督、イーサン・ホーク、エマ・ワトソン出演)。待機作には、『Risen』(ケビン・レイノルズ監督、ジョセフ・ファインズ、トム・フェルトン出演)、前述の『死霊のはらわた』のフェデ・アルバレス監督と再びチームを組む『A Man in the Dark』など。ほかの担当作品には、『セクシー・ビースト』(00・未)、『オールド・ボーイ』(13／スパイク・リー監督)などがある。

スペイン生まれ。ムルシア・ミュージック・コンセルバトリオ・スペリオールで音楽教育を受けた。マドリードに移り、マドリード音楽院で勉強を続けた。97 年、スペイン陸軍に参加し、11 年間、将校／音楽士として兵役に服した。そののち、コンサートのサクソホン奏者として成功し、スペインや海外で演奏して回った。93 年、ボストンに移り、権威あるバークリー音楽大学に入学し、映画とジャズの作曲を専攻した。バークリー大学で、ロバート・シェア賞とアチーブメント賞を受賞し、首席で卒業。

『Backroads』(97／エミリオ・マルティネス・ラザロ監督)で映画音楽の作曲家としてデビューを果たして以来、スペインで最も著名な監督たちと仕事をしてきた。また、マドリードにあるナショナル・オーディトリアム、ソフィア王妃オーディトリアム、カルチュラル・サークル・オブ・ファイン・アーツ、現代音楽アリカンテフェスティバル、そのほかの大きなコンサートホールやスペイン中の会場や開催地で、自身の音楽を自身の指揮で披露している。

［キャスト］	［CAST］
クリス・ヘムズワース（オーウェン・チェイス）	CHRIS HEMSWORTH (Owen Chase)
ベンジャミン・ウォーカー（ジョージ・ポラード）	BENJAMIN WALKER (George Pollard)
キリアン・マーフィー（マシュー・ジョイ）	CILLIAN MURPHY (Matthew Joy)
ベン・ウィショー（ハーマン・メルヴィル）	BEN WHISHAW (Herman Melville)
トム・ホランド（トーマス・ニカーソン）	TOM HOLLAND (Thomas Nickerson)
ブレンダン・グリーソン（トム・ニカーソン）	BRENDAN GLEESON (Tom Nickerson)

［スタッフ］	［STAFF］
ロン・ハワード（監督／製作）	RON HOWARD (Director/Producer)
チャールズ・レビット（脚本＆ストーリー）	CHARLES LEAVITT (Screenplay & Story)
リック・ジャッファ（ストーリー）	RICK JAFFA (Story)
アマンダ・シルバー（ストーリー）	AMANDA SILVER (Story)
ナサニエル・フィルブリック（原作）	NATHANIEL PHILBRICK (Author)
ジョー・ロス（製作）	JOE ROTH (Producer)
ポーラ・ワインスタイン（製作）	PAULA WEINSTEIN (Producer)
ウィル・ウォード（製作）	WILL WARD (Producer)
ブライアン・グレイザー（製作）	BRIAN GRAZER (Producer)
ブルース・バーマン（製作総指揮）	BRUCE BERMAN (Executive Producer)
サラ・ブラッドショウ（製作総指揮）	SARAH BRADSHAW (Executive Producer)
パラク・パテル（製作総指揮）	PALAK PATEL (Executive Producer)
エリカ・ハギンズ（製作総指揮）	ERICA HUGGINS (Executive Producer)
デイビッド・バーグスタイン（製作総指揮）	DAVID BERGSTEIN (Executive Producer)
アンソニー・ドッド・マントル（撮影）	ANTHONY DOD MANTLE (Director of Photography)
マーク・ティルデスリー（美術）	MARK TILDESLEY (Production Designer)
マイク・ヒル（編集）	MIKE HILL (Editor)
ダン・ハンリー（編集）	DAN HANLEY (Editor)
ジュリアン・デイ（衣装）	JULIAN DAY (Costume Designer)
ロケ・バニョス（音楽）	ROQUE BAÑOS (Composer)

2015年 アメリカ映画／2016年 日本公開作品／原題：IN THE HEART OF THE SEA
上映時間 122分／3D+2D／ビスタサイズ／ドルビーサラウンド7.1+ドルビーアトモス（一部劇場のみ）
字幕：林完治／映倫区分：G／配給：ワーナー・ブラザース映画